

常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告
二〇〇六―六

常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

財団法人
京都市埋蔵文化財研究所

常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡

2006 年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都には数多くの有形無形の文化財が今も生き続けています。それら各々の歴史は長く多岐にわたり、京都の文化の重厚さを物語っています。こうした中、地中に埋もれた文化財（遺跡）は今は失われた京都の姿を浮かび上がらせてくれます。それは、平安京建設以来 1200 年以上にわたる都市の営みやその周りに広がる姿をも再現してくれます。一つ一つの発掘調査からわかってくる事実もさることながら、その積み重ねによってより広範囲な地域の動向も理解できることにつながります。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、こうした成果を現地説明会や写真展、考古資料館での展示、ホームページでの情報発信などを通じ広く公開することで、市民の皆様へ京都の歴史像をより実態的に理解していただけるよう取り組んでいます。また、小学校などでの地域学習への成果の活用も、遺物の展示や体験授業を通じて実施しています。今後、さらに埋蔵文化財の発掘調査成果の活用を図っていきたいと願っています。

研究所では、平成 13 年度より一つ一つの発掘調査について報告書を発刊し、その成果を公開しています。調査面積が十数平方メートルから、数千平方メートルにおよぶ規模の違いはありますが、こうした報告書の積み重ねによって各地域の歴史がより広く深く理解できることとなります。

このたび J R 山陰線複線高架工事に伴う常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡の発掘調査成果を報告いたします。本報告書の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示たまわりますようお願い申し上げます。

末尾ではありますが、当調査に際して御協力と御支援をたまわりました多くの関係者各位に厚くお礼と感謝を申し上げる次第です。

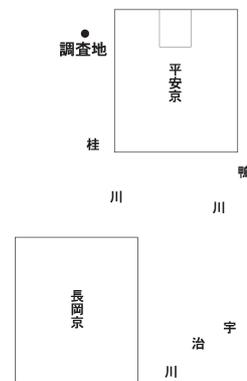
平成 18 年 7 月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 川 上 貢

例 言

- 1 遺 跡 名 常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡・広隆寺境内
- 2 調査所在地 京都市右京区太秦一ノ井町～太秦青木元町地内
- 3 委 託 者 京都市代表者 京都市長 梶本頼兼
- 4 調査期間 1区・2区：2006年1月20日～2006年4月28日
3区：2006年6月23日～2006年7月3日
- 5 調査面積 約1,206㎡
- 6 調査担当者 吉村正親・加納敬二・東 洋一
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「鳴滝」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 日本測地系（改正前）平面直角座標系VI（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用基準点 京都市が設置した京都市遺跡発掘調査基準点（一級基準点）を使用した。
- 11 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 12 遺構番号 地区（1A区、1B区、2A区、2B区、2C区、2D区、2E区、3区）ごとに通し番号を付し、遺構種類を前に付けた。
- 13 遺物番号 通し番号を付し、写真番号も同一した。
- 14 掲載写真 村井伸也・幸明綾子
- 15 遺物復元 村上 勉・出水みゆき
- 16 基準点測量 宮原健吾
- 17 本書作成 東 洋一・加納敬二
- 18 編集・調整 児玉光世

- 19 調査現場においては西山良平氏（京都大学教授）、伊藤淳史氏（京都大学文化財センター）から御教示いただいた。石材の同定は和田清吾氏（立命館大学教授）、鑑定は李永一氏（日本地学研究会）の御協力を得た。移動式カマドは田中久雄氏（大津市教育委員会）に御教示を得た。火葬骨については片山一道氏（京都大学霊長類研究所教授）に御教示いただいた。記して謝意を申し上げる。



（調査地点図）

0 2 4km

目 次

1. 調査経過	1
2. 周辺の調査	2
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 1 区の遺構	9
(3) 2 区の遺構	15
(4) 3 区の遺構	22
4. 遺 物	23
(1) 1 区の出土遺物	23
(2) 2 区の出土遺物	29
(3) 3 区の出土遺物	33
5. ま と め	34

図 版 目 次

図版 1	遺構	3 区・1 A 区・1 B - 1 区遺構実測図 (1 : 200)
図版 2	遺構	1 B - 2 区・1 B - 3 区遺構実測図 (1 : 200)
図版 3	遺構	2 A 区・2 B 区遺構実測図 (1 : 200)
図版 4	遺構	2 C 区・2 D 区・2 E 区遺構実測図 (1 : 200)
図版 5	遺構	1 1 A 区第 1 面全景 (東から) 2 1 A 区集石遺構 175 (北西から) 3 1 A 区土壌 73 検出状況 (南から)
図版 6	遺構	1 1 A 区第 2 面全景 (東から) 2 1 A 区溝 109 (北東から)
図版 7	遺構	1 1 B - 1 区全景 (東から) 2 1 B - 1 区溝 56 (南から)
図版 8	遺構	1 1 B - 2 区全景 (東から) 2 1 B - 2 区土壌 172 (南から)
図版 9	遺構	1 1 B - 2 区土壌 123 (東から)

	2	1 B - 2区竪穴住居 132 (東から)
図版 10 遺構	1	1 B - 3区全景 (東から)
	2	1 B - 3区溝 187 (南から)
図版 11 遺構	1	2 A区全景 (東から)
	2	2 B区西半 (西から)
図版 12 遺構	1	2 B区東半 (東から)
	2	2 B区石材 (南西から)
図版 13 遺構	1	2 B区火葬遺構 1 1列目 (南から)
	2	2 B区火葬遺構 1 2列目 (南から)
図版 14 遺構	1	2 B区火葬墓 2 (南から)
	2	2 C区全景 (東から)
図版 15 遺構	1	2 C区竪穴住居 26 (東から)
	2	2 C区竪穴住居 34 (南東から)
図版 16 遺構	1	2 D区全景 (東から)
	2	2 E区全景 (東から)
図版 17 遺構	1	2 E区竪穴住居 23・24 (東から)
	2	3区全景 (東から)
図版 18 遺物	1	区出土土器・滑石製品
図版 19 遺物	2	区出土土器・石材・骨
図版 20 遺物	1	1区出土鉄釘・鉄製品・銭貨
	2	2 B区火葬遺構 1 出土鉄釘

挿 図 目 次

図 1	1区調査前全景 (東から)	1
図 2	2区作業風景 (東から)	1
図 3	調査位置図 (1 : 6,000)	3
図 4	葛野郡北西部の地形と古墳時代から飛鳥時代の遺跡分布図	6
図 5	断面模式図	7
図 6	1 B - 2区竪穴住居 132・381・382・409、溝 266 実測図 (1 : 50)	10
図 7	1 A区集石遺構 175・土壇 73・溝 109 実測図 (1 : 40)	11
図 8	1 A区柱列 1～3 実測図 (1 : 100)	12

図9	1 B - 1区溝 56 実測図 (1 : 50)	13
図10	1 B - 2区土壙 172 実測図 (1 : 20)	14
図11	1 B - 3区溝 187・294 実測図 (1 : 50)	14
図12	2 C区竪穴住居 26・29・34、溝 60 実測図 (1 : 40)	16
図13	2 E区竪穴住居 23・24、2 D区竪穴住居 33 実測図 (1 : 40)	17
図14	2 A区土壙 20・22 実測図 (1 : 20)	19
図15	2 A区土壙 31 実測図 (1 : 20)	20
図16	2 B区火葬遺構 1・火葬墓 2 実測図 (1 : 40)	21
図17	2 B区土取穴 3・落込み 15 実測図 (1 : 100)	21
図18	1区出土遺物実測図 (1 : 4)	25
図19	1区・2区出土軒瓦拓影・実測図 (1 : 4)	28
図20	1区出土鉄釘・鉄製品実測図、銭貨拓影 (1 : 2)	29
図21	2区出土遺物実測図 (1 : 4)	30
図22	2 B区火葬遺構 1 出土鉄釘実測図 (1 : 2)	32

表 目 次

表1	周辺の主要な調査一覧表	4
表2	遺構概要表	8
表3	遺物概要表	23

常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡

1. 調査経過

本調査はJR山陰線複線高架工事に伴う発掘調査で、花園駅から太秦駅間の総延長距離 560 m、幅 3～4 m の細長い旧路線が対象地である。東映太秦映画村の東側を南北に通る城北街道（宇多野・吉祥院線）を挟んで、西側の 210 m を 1 区、東側の 260 m を 2 区とした。また別に太秦駅の東側で調査を実施し、それを 3 区とした。調査地が細長いため、1 区は蜂岡踏切を境に西側を A 区、東側を B 区に分け、さらに B 区は西から B - 1・B - 2・B - 3 区に細分した。2 区は現在機能している水路を境に西から順に A・B・C・D・E 区に細分した。3 区は、埋設管が敷設されている箇所を除く、長さ 5 m を発掘調査した。

1・2 区の調査は 1 月 20 日より 1 区西端より重機掘削を開始した。1 区は東端の落ち込みを除いて地表下 0.2～0.3 m で遺構検出面となったが、2 区は西端部を除いて深さが 1～1.5 m となり、法面に 45° の傾斜を設けたので、遺構検出面の幅が 0.5 m 前後の調査となった。

調査区の幅が狭いため遺構の規模や性格を把握できないものが多いなか、1 区で飛鳥時代の竪穴住居、中世の南北溝・土壇墓などを、2 区で弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代前期の南北溝、中世末期の土取り土壇に廃棄された古墳の石室石材などを検出した。これらの成果を受けて 3 月 27 日に広報発表を行った。

その後も 1 区で飛鳥時代の竪穴住居を 4 棟検出し、2 区東半部で古墳時代の溝や中世の土壇墓と人骨を伴う火葬遺構を検出した。この火葬遺構の調査完了をもって、4 月 24 日に現地調査を終了した。4 月 24 日から仮設事務所などを撤去し、4 月 28 日に 1・2 区の調査を終了した。

3 区は太秦駅東の青木元第 1 踏切と同第 2 踏切間の線路北側が調査対象地である。この調査区は古墳時代から平安時代の集落跡である上ノ段町遺跡の東半部の北限にあたっていることから、関連する遺構・遺物が予想された。その間は線路敷より約 1 m 高く、北側が宅地であることから、出入りのための生活道路となっている。また、道路下には下水埋設管が敷設されていることから



図1 1区調査前全景（東から）



図2 2区作業風景（東から）

これらに支障のない部分に調査区を設定して実施した。調査区の規模は南北2 m、東西5 m。調査は6月23日から開始した。重機掘削により近・現代盛土を排除し、遺構検出、全景撮影、図面作成などの作業を6月29日に終え、7月3日までに埋め戻しを行い、調査を完了した。

2. 周辺の調査

今回の調査地周辺（東と北が御室川、西は京福電鉄、南を三条通に囲まれた範囲）で、実施された本格的な調査は、1976年の発掘調査（16）で発見された常盤東ノ町古墳群の調査からである。それ以後、発掘調査をはじめ試掘・立会調査は50件を超え、遺構・遺物の検出が相次ぎ、新たな遺跡の発見や周知遺跡の拡大となっている。以下、そうした状況について、図3・表1で示した主要な調査を中心に概述する。

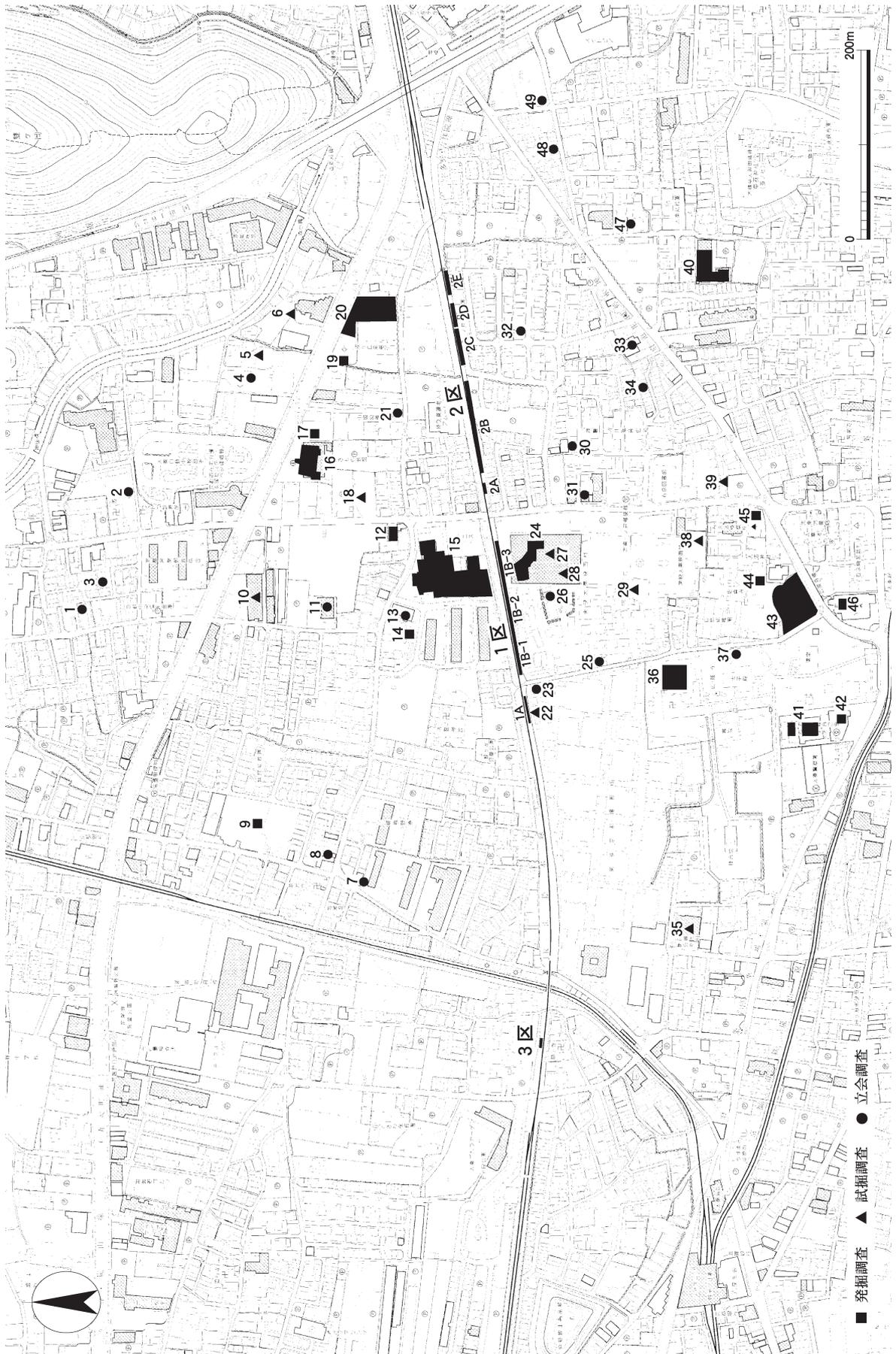
常盤東ノ町古墳群 1976年に実施された発掘調査（16）により6世紀後半から7世紀にかけての円墳3基と内部主体の横穴石室を検出し、当古墳群の発見となった。その他に室町時代から江戸時代の土壙墓群も検出し、墓域が中世から近世にまで継続していることも判明した。また同年の東接地での発掘調査（17）でも、円墳1基と室町時代の土壙墓群を検出している。また仁和寺子院跡の調査（19）で、弥生時代から古墳時代の遺物包含層、平安時代の遺構・遺物などが検出されている。1979年の発掘調査（12）では古墳の周溝を検出し、当古墳群が南西にさらに広がることを確認された。近年の調査では、立会調査（20）で古墳時代の溝や須恵器・刀子などの遺物が出土しており古墳群の東への広がりも示されている。

常盤仲之町遺跡 1977年に常盤東ノ町古墳群から南西の発掘調査（15）で、古墳群と同時期の集落跡である常盤仲之町遺跡が発見された。竪穴住居跡24棟、掘立柱建物4棟、その他に鎌倉時代から江戸時代の土壙墓群が検出された。また同年の発掘調査（14）では室町時代の柱穴・土壙を検出している。近年の調査では2001年に京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した発掘調査（9）で室町時代の土壙、溝などが検出されており、1977年の調査地（15）から北西約300 mにまで中世の遺構が広がることを判明している。また東への広がりについては、北東約200 mの地高にあたる調査（16・17）に及んでいる。

村ノ内町遺跡 1980年の立会調査（4）で弥生時代の遺物包含層を確認し、1986年の試掘・立会調査（1）では、弥生時代中期の土壙・遺物包含層などが検出されている。また立会調査（2・3）では弥生時代の遺物包含層が、1988年に実施された試掘調査（5・6）では、弥生時代から平安時代の遺物包含層が確認されており、それらの広がりから東に流れる御室川に沿って、遺跡が立地するものと考えられる。

和泉式部町遺跡 1985年の広域立会調査（47）で古墳時代の竪穴住居跡が発見されたことにより、遺跡の存在が示され、1987年の発掘調査（40）で弥生時代中期から古墳時代中期の竪穴住居跡22棟が検出された。村ノ内遺跡とともに御室川右岸に立地する集落跡として重要である。

広隆寺境内 1977年の発掘調査（42）で、飛鳥時代から奈良時代の掘込み地業を伴う基壇（土壇状遺構）が検出された。1978年には、弁天島経塚群の発掘調査（43）で平安時代後期の経塚

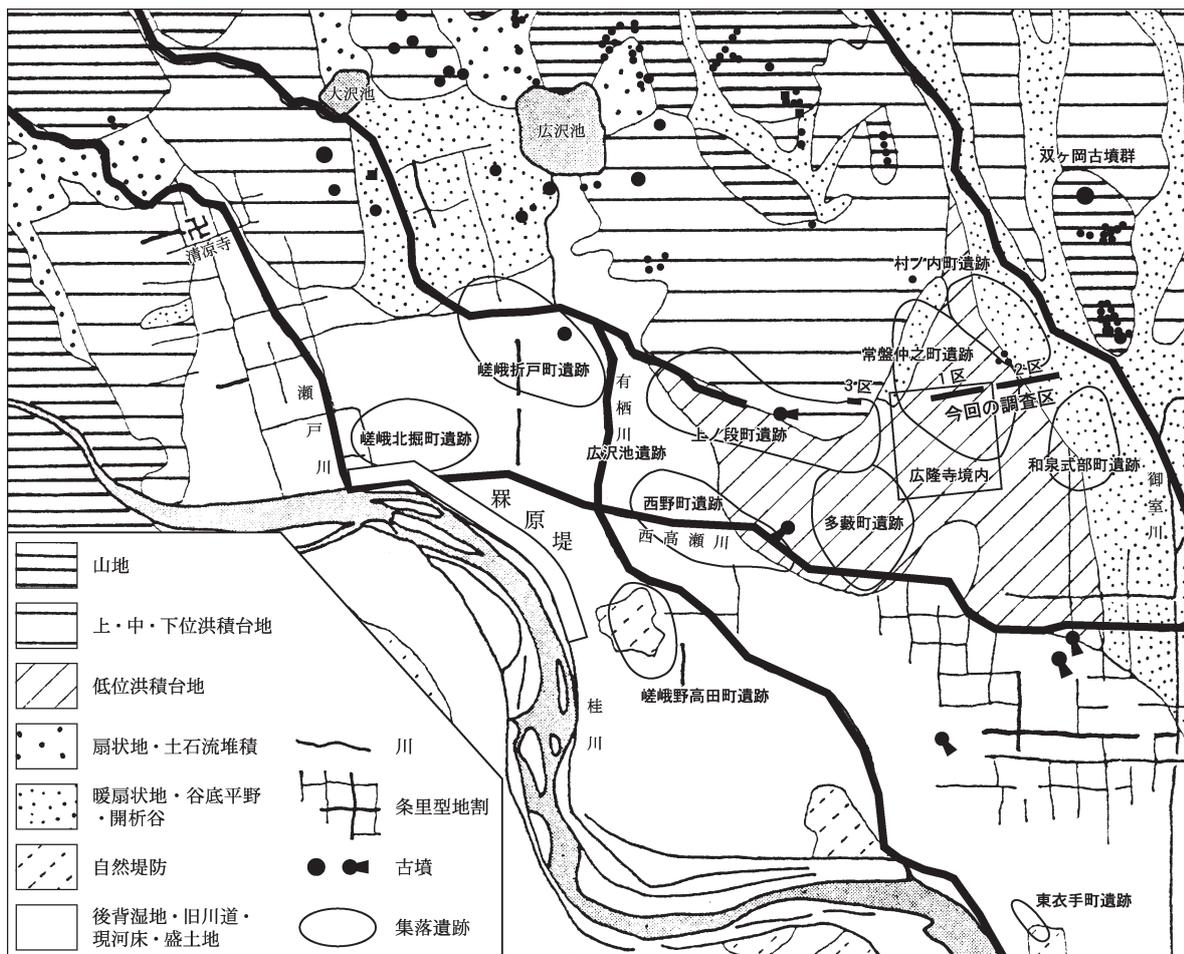


※調査地点の数字は表1のNoと対応 図3 調査位置図 (1 : 6,000)

表1 周辺の主要な調査一覧表

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
1	1986	試掘立会	1986.11.21～ 1987.04.03	弥生中期の土壌・流路・包含層、土師器・陶器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
2	1988	広域立会	1988.05.26～ 1989.05.12	弥生の包含層、古墳後期の溝、平安の包含層、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・瓦	「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年
3	1993	立会	1993.10.06～ 1993.10.13	弥生の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡立会調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
4	1980	立会	1980.05.22	弥生の包含層、弥生土器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
5	1988	試掘	1988.10.28	弥生の包含層、弥生土器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
6	1990	試掘	1991.03.12	平安の溝、弥生～平安の包含層	「試掘一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
7	1982	立会	1983.03.03	平安の柱穴	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
8	1986	立会	1986.06.03	室町の土壌5・包含層、土師器・瓦器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
9	2001	発掘	2001.05.07～ 2001.06.29	室町時代の土壌・溝	「常盤仲之町遺跡」『京都府遺跡調査概報』第102冊-1（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2002年
10	1982	試掘	1982.08.09～ 1982.08.10	古墳後期～室町の土壌・包含層、土師器・白磁	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
11	1991	立会	1991.12.03～ 1991.12.05	平安前期の長方形土壌、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成3年度 京都市文化観光局 1992年
12	1979	発掘	1980.02.27～ 1980.03.15	古墳周溝、鎌倉の土壌2、土師器・須恵器・瓦器・陶器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
13	1986	立会	1986.11.04～ 1986.11.25	平安後期の東西溝	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年
14	1977	発掘	1978.01.30～ 1978.02.18	室町の柱穴・土壌	「日本電信電話公社嵯峨野住宅集会所新築に伴う発掘調査」『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
15	1976	発掘	1977.02.01～ 1977.06.10	古墳後期の竪穴住居24・建物4・溝、平安の建物4他	『常盤仲之町集落跡発掘調査報告』京都市埋蔵文化財研究所調査報告Ⅲ（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
16	1976	発掘	1976.10.26～ 1976.12.06	古墳後期の円墳3、室町～江戸の土壌墓群、土師器・須恵器	『常盤東ノ町古墳群』京都市埋蔵文化財研究所調査報告-I（財）京都市埋蔵文化財研究所 1977年
17	1976	発掘	1976.11.03～ 1976.11.15	古墳後期の円墳1、室町～江戸の土壌墓群、土師器・須恵器	「常盤東ノ町古墳群」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1978-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
18	1992	試掘	1993.03.25	古墳の溝1、平安・鎌倉の土壌2、土師器・須恵器・銭	「常盤東ノ町古墳群」『京都市内遺跡試掘調査概報』平成5年度 京都市文化観光局 1994年
19	1976	発掘	1976.11.24～ 1976.12.07	平安の柱穴群・土壌2、弥生～古墳の包含層、弥生土器・須恵器	「仁和寺子院跡」『京都市埋蔵文化財研究所概報集1979-I』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1978年
20	1995	立会	1995.09.26～ 1995.10.07	平安の溝、古墳の溝、時期不明の土壌、溝、土師器・刀子・須恵器	『京都市内遺跡立会調査概報』平成7年度 京都市文化観光局 1996年
21	1985	立会	1985.12.25～ 1986.01.06	路面	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
22	1984	試掘	1984.11.30	平安の土壌1・包含層、須恵器・瓦	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
23	1989	立会	1989.09.04	平安中期の土壌、土師器・須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
24	1995	発掘	1996.01.11～ 1996.04.13	飛鳥の竪穴住居4、平安～江戸の遺構	関西文化財調査会による発掘調査実績報告 近日報告書刊行予定
25	1988	広域立会	88.05.26～ 89.05.12	古墳～江戸の遺構・包含層、土師器・須恵器・瓦	「常盤東ノ町古墳群・仁和寺院家跡・広隆寺旧境内」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1993年

No.	調査年度	方法	調査日	調査概要	文 献
26	1980	立会	1980.12.13	室町の土壌墓1、古墳後期の包含層	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査報告』昭和55年度 京都市文化観光局 1981年
27	1981	試掘	1981.12.07	室町の土壌1、平安～室町の包含層	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
28	1982	試掘	1982.12.10	古墳後期～室町の土壌・柱穴	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
29	1981	試掘	1981.12.14～ 1981.12.17	鎌倉～室町の土壌6・柱穴18、土師器・須恵器・瓦器・瓦	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘・立会調査概報』昭和56年度 京都市文化観光局 1982年
30	1986	広域立会	1987.02.23～ 1988.03.30	平安～江戸の遺構・包含層、土師器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・軒瓦	「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
31	1988	立会	1989.01.24	鎌倉の包含層、土師器・白磁	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』平成元年度 京都市文化観光局 1990年
32	1986	広域立会	1987.02.23	弥生～江戸の遺構・包含層、弥生土器・土師器・須恵器・軒瓦	「広隆寺旧境内・上ノ段町遺跡・和泉式部町・一ノ井遺跡・森ヶ東瓦窯跡・常盤東ノ町古墳群」『昭和62年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
33	1984	立会	1984.09.17	平安の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和59年度 京都市文化観光局 1985年
34	1987	立会	1987.09.09	平安～室町の包含層	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度 京都市文化観光局 1988年
35	1985	試掘	1985.07.24	古墳後期の包含層、須恵器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和60年度 京都市文化観光局 1986年
36	1979	発掘	1980.02.01～ 1980.03.31	古墳後期の竪穴住居、平安・鎌倉・室町の土壌、土師器・須恵器・輸入陶磁器・陶器・磁器・植輪	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
37	1982	立会	1982.09.10～ 1982.09.22	平安中期・後期の土壌、土師器・須恵器・瓦・瓦器	「調査概要一覧表」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和57年度 京都市文化観光局 1983年
38	1983	試掘	1983.12.14	平安前期・後期の土壌・包含層、土師器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和58年度 京都市文化観光局 1984年
39	1988	試掘	1988.08.01	鎌倉の柱穴・土壌・包含層、土師器	「調査一覧表 太秦地区」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和63年度 京都市文化観光局 1989年
40	1987	発掘	1987.05.06～ 1987.07.31	弥生中期の竪穴住居、古墳前期の竪穴住居・土師器、古墳中期の須恵器	「和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1991年
41	1991	発掘	1992.01.12～ 1992.02.22	平安前期～中期の溝・土壌・柱穴、江戸の溝	「広隆寺旧境内2」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
42	1977	発掘	1977.05.03～ 1977.06.12	飛鳥の墓壇、奈良～平安の建物、瓦・須恵器・土師器	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
43	1977	発掘	1977.11.11～ 1978.02.11	平安後期の経塚群、土師器・須恵器・白磁・軒瓦・金属製品・石製品他	『京都嵯峨野の遺跡』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第14冊（財）京都市埋蔵文化財研究所 1997年
44	1993	発掘	1993.04.17～ 1993.05.31	飛鳥の竪穴住居・土壌、平安中期の溝・柱穴	「広隆寺旧境内」『平成5年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1996年
45	1980	発掘	1980.10.20～ 1980.11.24	古墳後期の竪穴住居、平安中期の建物・柵・柱穴	『広隆寺跡－右京検察庁庁舎改築に伴う発掘調査の概要－』昭和55年度（財）京都市埋蔵文化財研究所 1981年
46	1990	発掘	1991.03.19～ 1991.04.20	飛鳥の溝・柱穴・土壌、平安～室町の包含層	「広隆寺旧境内1」『平成3年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1995年
47	1985	広域立会	1985.07.01～ 1986.03.15	古墳時代竪穴住居・土壌・溝・柱穴、平安前期・中期の遺構多数、室町～江戸の遺構多数	「広隆寺旧境内・一ノ井遺跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
48	1985	広域立会	1985.05.07～ 1985.11.30	古墳前期の竪穴住居・土壌・溝、平安中期の土壌・流路、室町～江戸の土壌・溝・他	「森ヶ東瓦窯跡・和泉式部町遺跡」『昭和60年度京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1988年
49	1986	立会	1986.11.17	ロストル式平窯1・灰原、軒平瓦4	「森ヶ東瓦窯跡」『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度 京都市文化観光局 1987年



※ 金田章祐『条里と村落の歴史地理学研究』大明堂 1985年 図2-9「葛野郡北西部の微地形と条里型地割の分布」を加工・加筆

図4 葛野郡北西部の地形と古墳時代から飛鳥時代の遺跡分布図

16基が発見されている。1980年には広隆寺霊宝館建設の調査(36)では飛鳥時代の竪穴住居跡4棟が検出され、また1991年の発掘調査(41)では平安時代前期の溝が検出されている。太秦映画村内での調査(24・25～29)では古墳時代から江戸時代の遺構・遺物が検出されている。とくに1996年の発掘調査(24)では、飛鳥時代の竪穴住居4棟が検出され、発掘調査(36)と同様に広隆寺創建に直接関連することとして注目される。

森ヶ東瓦窯跡・一ノ井遺跡 森ヶ東瓦窯跡では1985年の立会調査(48)で、多量の瓦を含む土壌を検出。さらに翌年の1986年の立会調査(49)でも、ロストル式の平窯が発見されており、いずれも瓦窯跡の一端を示すものとして注目された。一ノ井遺跡では、いずれも立会調査(30～34)が行われ、平安時代から江戸時代の遺構・遺物が検出されている。近接する広隆寺と関連する遺跡とみられる。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図4・5)

調査地の1区全体と2区西半および3区は洪積台地で高台に位置し、2区東半は御室川西岸の緩扇状地で低地に位置する。1区は西端での遺構検出面が標高44.95mで、2区の東端遺構検出面は標高43.17mであり、その高低差は1.78mである。鉄道が敷設された明治の陸地測量部の地図などによれば高台が竹藪・畠、低地が水田となっている。これを裏づけるように2区東半は鉄道

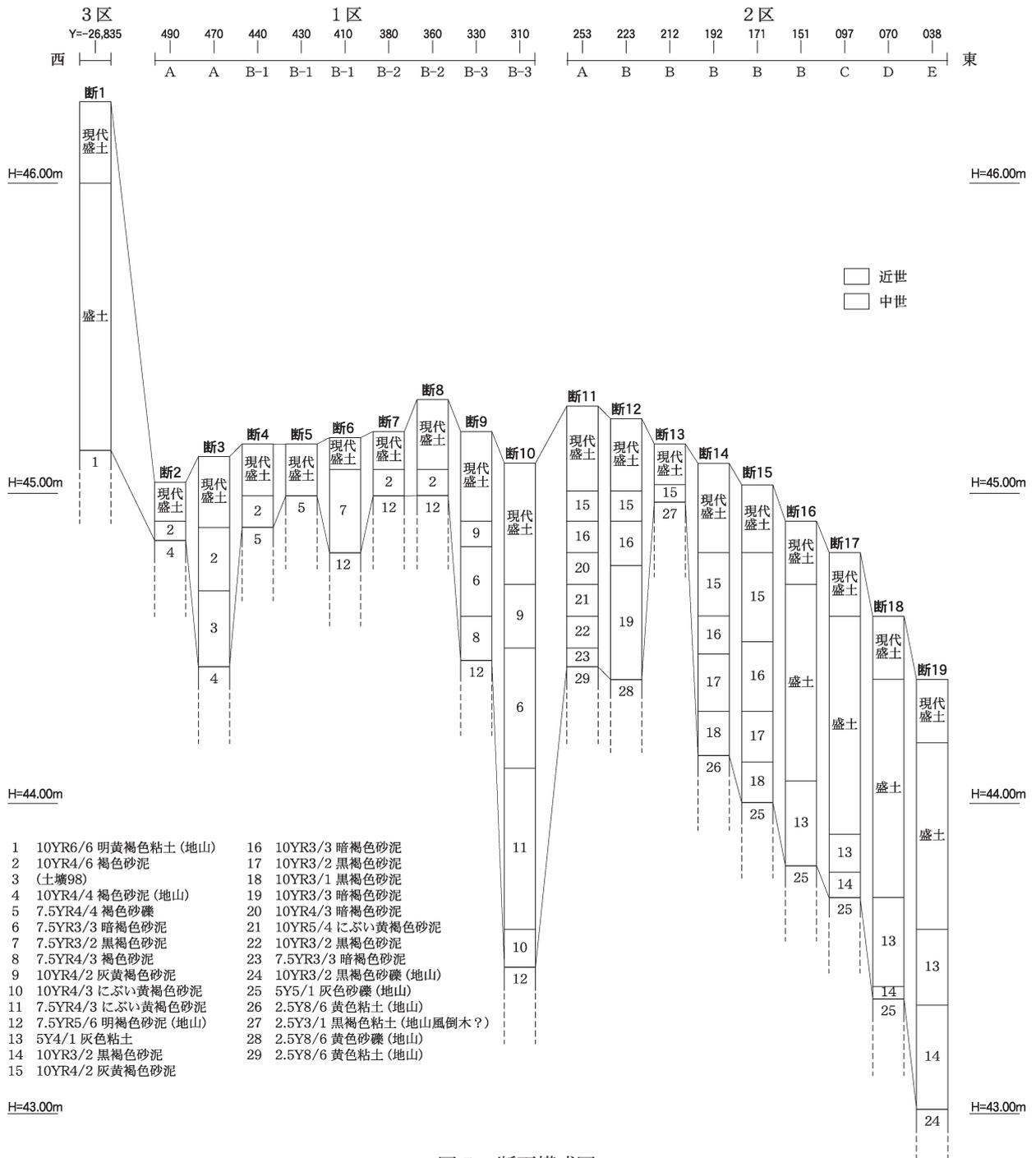


図5 断面模式図

敷設時の際、旧水田上に厚い盛土をしていたことを確認している。

1区の基本層序は現地地表下0.1～0.4mが鉄道敷設に伴う碎石を含む盛土である。盛土下は1A区では中世の遺物を含む褐色砂泥層が堆積している。この層を切り込んで中世から近世の柱穴・土壇・溝などの遺構を検出している。この上面を第1面とした。褐色砂泥層の下は褐色粘土の地山である。地山は東に向かって傾斜しており、西端では標高44.85m(断2)、東端は44.44m(断3)と、約0.4mの高低差があった。東半に厚く堆積する褐色砂泥層を除去すると、地山面で中世の柱穴・土壇・溝などの遺構を検出した。この上面を第2面とした。

1B区はB-1区からB-2区まで盛土下には褐色砂泥層の堆積が断続的にみられたことから、地山面で中世の柱穴・土壇・溝を検出した。B-2区でも地山面で飛鳥時代の竪穴住居と鎌倉時代の遺構群を検出している。またB-3区では盛土下に地山の傾斜に沿って、近世の堆積層がみられ、東端では現地地表下1.1mまで深くなる。地山の標高は東端43.45m(断10)で、Aの西端(断2)との比高差は1.4mとなる。

2区のA区とB区西半は線路のバラス下が鉄道敷設前の薄い耕作土である。その下に近世の堆積層・中世の堆積層が2～3層堆積していた(断11・12)。黄白色のシルトと砂礫層からなる地山で古墳時代の遺構が成立している。

2B区の西半には東側へ黄色粘土の地山に飛鳥時代と考えられる落込み15を掘り込む1mの段差があり(断14)、そこから東側約80mは削平面となる。その削平面上に中世の堆積層が2～3層堆積していた。堆積層の最下層から瓦器片が出土しており、開墾は中世前期である可能性が高い。開墾前は東になだらかに下がる傾斜面であったと考えられる。またこの段差の西側は線路のバラス直下で地山となり丘状の隆起が見られる。

2B区の西端部は近代の水田による開墾によって中世の堆積層を削平して一段東に下がっており、水田層の下は砂礫層の地山である。この地山に中世の溝・平安時代の溝が成立する。

2区の東半となるC～E区の基本層序(断17～19)はいずれも同一である。鉄道敷設のための盛土直下が近代のグライ化した水田層であり、線路北側に展開する現在の耕作土と同一レベル

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	
	1 区	2 区
弥生時代中期		竪穴住居1棟
古墳時代後期		竪穴住居3棟、溝、落込み
飛鳥時代	竪穴住居4棟、土壇	竪穴住居2棟、落込み
平安時代前期		溝、柱穴
鎌倉時代	集石遺構、柱列、土壇、溝	溝、土壇
室町時代		火葬遺構・火葬墓、土取穴
近 世	土壇	

である。その下に中世の耕作土と考えられる褐灰色砂泥の包含層が地山の上に堆積する。この包含層上面に成立する遺構はなく、全てこの包含層直下の地山面に成立していた。したがってこの包含層で中世以前の遺構面が保護された状態となっていた。またこの地区の遺構埋土はほとんどが黒色ないし黒褐色砂泥であり、地山は東側ほど円礫層が多くなり御室川の影響が考えられる。

3区の基本層序は現地表下0.2 mが碎石を含む盛土で、以下1.1 mまでが近・現代盛土である。その下は地山とみられる明黄褐色砂泥層がみられる。遺構検出はこの面で行った。地山を掘り込む近代の落ち込みが多く、東壁際に江戸時代の土壇1の北肩部を検出した。残存長は南北0.5 m以上、東西は不明、深さ0.4 m以上。埋土は暗褐色砂泥である。この遺構以外に近世以前の遺構は検出していない。検出した地山面の標高は調査区の東端で45.14 m（断1）で、東に345 m離れた1 A区の西で44.85 m（断2）と、その比高差は0.29 mとわずかである。近代盛土は明治30年に開業した二条駅から嵯峨駅までの京都鉄道敷設時のものとみられる。その後、さらに盛土がなされて現在の宅地化が行われた様子が窺われる。なお全調査区を含めて葛野郡条里を示す遺構は検出していない。1区・2区・3区はそれぞれ自然地形や遺構・遺物内容も異なるので別々に記載する。

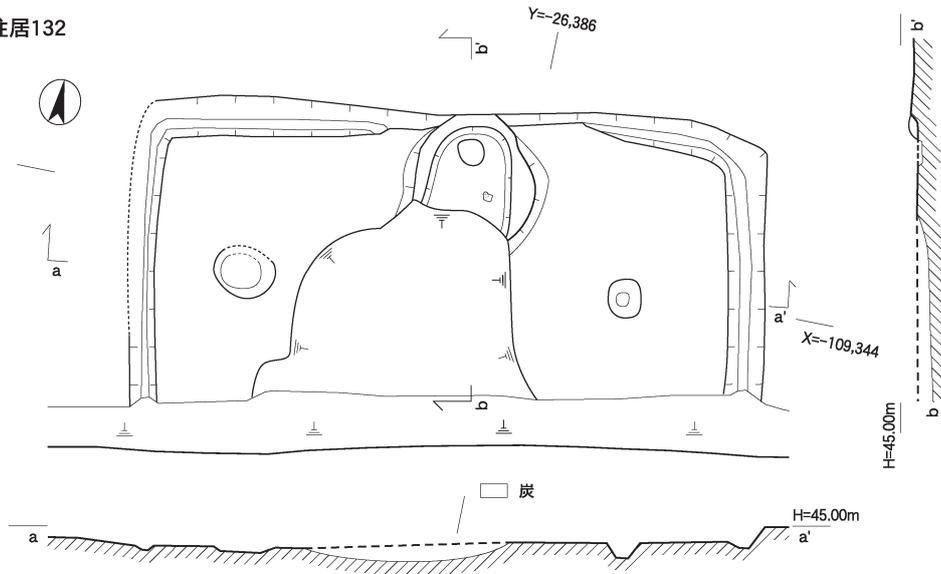
（2）1区の遺構（図版1・2）

検出した遺構の総数は562基である。遺構には柱穴、土壇、土壇墓、集石遺構、溝、竪穴住居などがある。全体では柱穴と土壇を多く検出している。柱穴の規模は径0.3～0.4 m、深さ0.4～0.5 mで、内部に根石を据えるものもある。これらの柱穴は、掘立柱建物、あるいは柵列の一部とみられるが、調査区が旧線路下にあたり、細長く狭溢なため、全体を復元するには至らなかった。そのため柱筋が通るものを柱列とした。土壇は平面形が方形や円形のものが多く、方形のもの平均規模は幅0.5 m、長さ1 m、円形のもの平均規模は径0.5 mである。それらの土壇群は北接地での常盤仲ノ町遺跡の発掘調査で検出された鎌倉時代の土壇墓群と類似していることから、墓域の広がりとして考えられる。また、検出した溝についても墓域に関連する遺構とみられる。以下に検出した遺構について時代順に概述する。

1) 飛鳥時代の遺構

竪穴住居132（図6、図版9）1 B - 2区西半部の南側で検出した。大きく削平を受けていたが、住居全体の北半部を検出した。南半部は調査区外の南に延びる。規模は東西が4.2 m、南北は2 m以上。平面形状は方形をなすとみられる。深さは検出面から床面までが0.1 mと遺存状態は悪い。貼り床は凹凸を整えるための小礫混じりの砂泥層がみられるが、鎌倉時代の土壇・柱穴などにより、削平が著しい。柱穴は2基検出した。いずれも円形の掘方である。柱間は約2.5 m。また幅0.2 m、深さ0.05 mの壁溝が周囲に巡る。北辺のほぼ中央部には竈が据えられている。基底部分のみが残っているが、両袖、炉床が確認できる。住居跡の方位は真北に対して西へ10°振れる。住居内の床面からは須恵器杯蓋・身や滑石製の紡錘車、土錘が出土している。

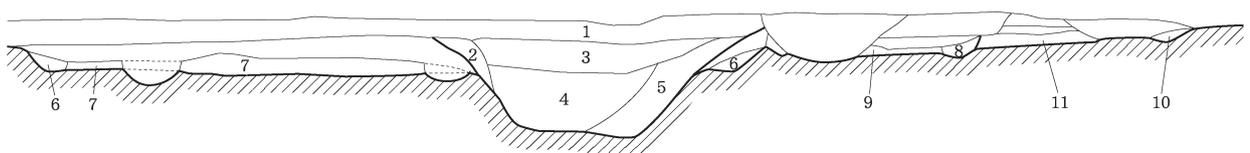
竪穴住居132



竪穴住居381・382・409、溝266

北壁

H=45.00m



北壁

- | | | |
|------------------------|---------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR3/4 暗褐色砂泥 (溝266) | 4 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (溝266) | 8 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥 (竪穴382壁溝) |
| 2 7.5YR4/4 褐色砂泥 (溝266) | 5 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 (溝266) | 9 7.5YR5/4 にぶい黄褐色砂泥 (竪穴382埋土) |
| 3 7.5YR4/6 褐色砂泥 (溝266) | 6 7.5YR4/4 褐色砂泥 (竪穴409壁溝) | 10 7.5YR4/4 褐色砂泥 炭少量含む (竪穴381壁溝) |
| | 7 7.5YR4/3 褐色砂泥 (竪穴409埋土) | 11 7.5YR4/3 褐色砂泥 (竪穴382埋土) |

Y=-26,368

Y=-26,362

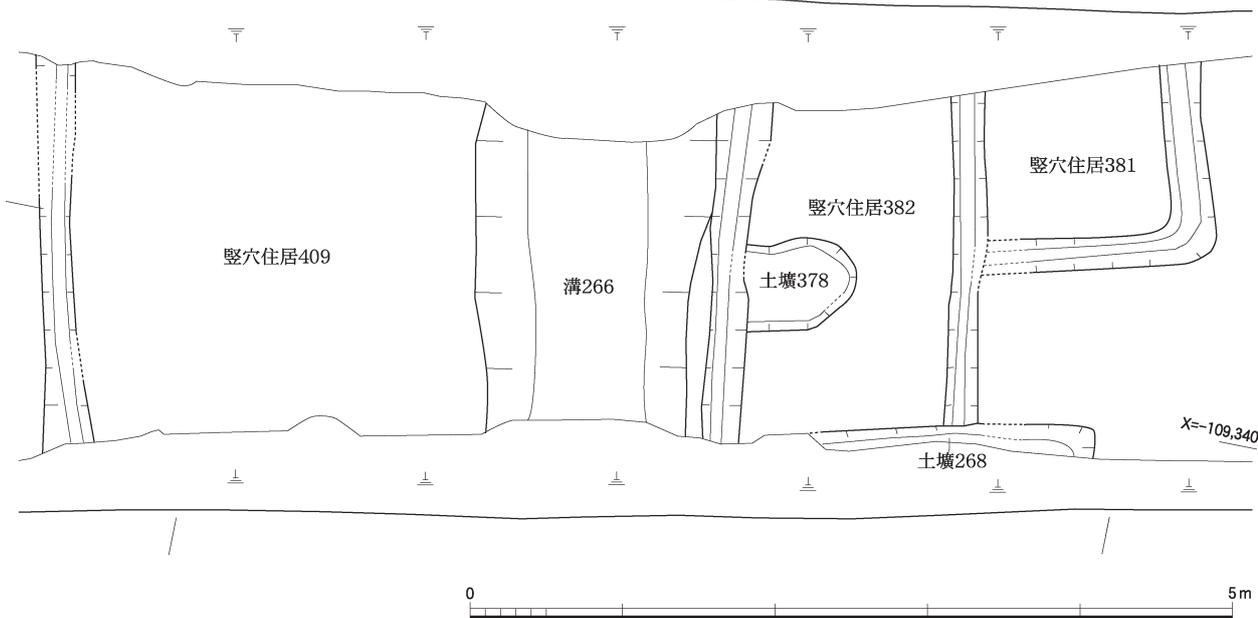


図6 1 B - 2区竪穴住居 132・381・382・409、溝266 実測図 (1 : 50)

竪穴住居 381・382・409 (図6) 1 B - 2 区のほぼ中央部で鎌倉時代の南北溝 266 に分断された竪穴住居 3 棟を重複した状態で検出した。検出面は地山面で、いずれも中世の遺構群によって削平を受け遺存状況は良くない。また重複していることから時期が異なるが、それぞれの方位はほぼ同じで真北に対して西に 10° 傾く。

竪穴住居 381 は竪穴住居 382 に削平された状態で検出した。壁溝は溝幅 0.2 ~ 0.25 m、深さ 0.1 m で、住居の東南コーナー部にあっており、折れ曲がって調査区外の北に延びる。埋土は褐色砂泥で、炭を少量含んでいる。床面は削平を受けて地山面が露出している。

竪穴住居 382 は竪穴住居 409 に削平され、東側の壁溝が残存していた。溝幅 0.2 ~ 0.25 m、深さ 0.10 m で南北約 2.2 m にわたり検出した。埋土は炭を少量含む褐色砂泥。

竪穴住居 409 は西と東の壁溝を検出した。東の壁溝は溝 266 の肩部で検出した。溝幅 0.2 m、深さ 0.09 m で、調査区外の南北に延びる。南・北壁断面に残存していたことも合わせ、南北 2.1 m 以上である。西側の壁溝は幅 0.2 ~ 0.3 m、深さが 0.06 m である。埋土はともに暗褐色砂泥で、少量の炭を含む。東西の壁溝から東西幅 4.6 m の規模である。

土壌 378 (図6) 竪穴住居 382 内で検出した。幅 0.5 m、長さ 0.7 m 以上の楕円形で、深さ 0.1 m。埋土は竪穴住居 382 の壁溝の埋土と類似した炭を少量含む褐色砂泥である。土壌内東端から飛鳥時代の須恵器高杯が出土している。

土壌 317 1 B - 3 区溝 294 に西接して検出した。調査区外の北に延びる方形をなす隅部とみられ、壁溝はみられなかったが、竪穴住居の可能性はある。土壌内から飛鳥時代の須恵器杯蓋・杯が出土した。

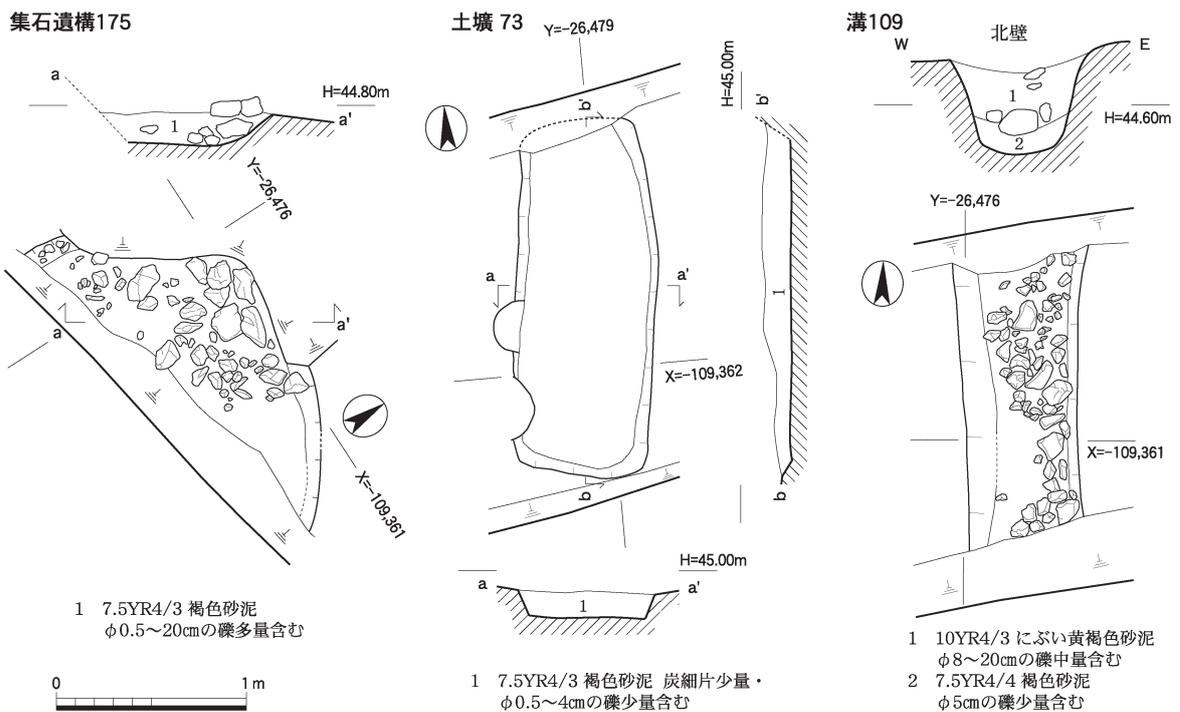


図7 1 A区集石遺構 175・土壌 73・溝 109 実測図 (1 : 40)

2) 鎌倉時代の遺構

集石遺構 175 (図7、図版5) 1 A区第1面東半部の南端で検出した。北側は大きく削平を受け、東端も土壌に削平されている。残存規模は南北0.7 m、東西1.5 m以上の不定形で、深さ0.2 m。さらに調査区外の南に延びる。遺構内は長さ0.1～0.2 m大の角礫が詰まっていた。埋土は褐色砂泥で、炭片を含む。土師器、須恵器、瓦器などと共に埴埴、鉄釘が出土している。

土壌 73 (図7、図版5) 1 A区第2面東半部で検出した土壌の基底部である。北肩部は調査区

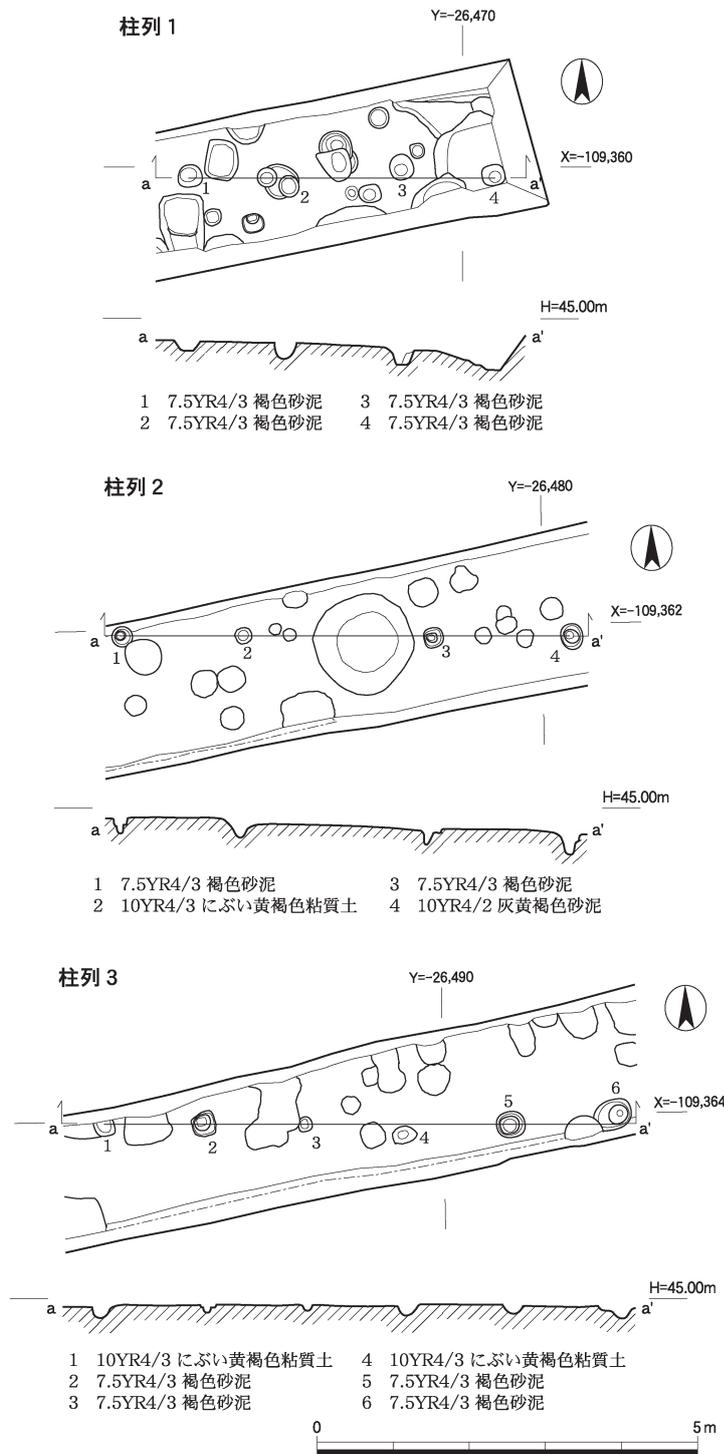


図8 1 A区柱列1～3実測図 (1:100)

外に延びるが、ほぼ全形を検出しており、南北1.9 m、東西0.7 mの長方形。深さは0.2 m。壁高は、ほぼ垂直で、底は平坦であることから、棺が据えられていた可能性が考えられる。埋土は褐色砂泥で、明褐色粘土ブロックと径0.1～0.4 mの小石や炭細片を含む。土師器・須恵器のいずれも細片が出土している。

土壌 74 1 A区のほぼ中央部で検出した。径0.85 mの円形で、深さ0.13 m。埋土は褐色砂泥で炭を少量含む。土壌内からは土師器、須恵器、瓦器、瓦、鉄釘などが出土している。底面は平坦である。

土壌 91 1 A区土壌73の南の南壁際で検出した。幅0.6 m、長さ0.55 m以上、深さ0.1 mの方形で、調査区外の南に延びる。埋土はにぶい黄褐色粘土。土壌内から土師器、焼締陶器、鉄釘が出土した。土壌73と類似している。

溝 109 (図7、図版6) 1 A区東半部で検出した南北溝である。溝幅0.7 m、深さ0.4 m。南北1.4 mにわたり検出した。さらに調査区外南北に延びる様相を呈していた。溝の方位はほぼ真北方向であ

る。断面はU字状を呈する。埋土は上層・下層に分かれる。上層は黄褐色砂泥で、長さ 0.08 m～0.2 m大の角礫が多い。下層は褐色砂泥で、長さ 0.05 m大の角礫が大量に含まれる。上層からは土師器小片が出土している。

柱列 1 (図 8) 1 A区東端部で検出した東西方向の柱穴 4基からなる柱列である。柱間は 1.4 mの等間隔である。東西ともに調査区外に延びる。柱列の方位は、ほぼ真東西である。

柱列 2 (図 8) 1 A区中央部で検出した東西方向の柱穴 4基からなる柱列である。柱間は西から 1.6 m、2.5 m、2.0 mである。東西ともに調査区外に延びる。柱列の方位は、ほぼ真東西で柱列 1と同じである。

柱列 3 (図 8) 1 A区西端部で検出した東西方向の柱穴 6基からなる柱列である。柱間は西から 1.4 m、1.3 m、1.3 m、1.3 m、1.4 mである。柱列の方位は、柱列 2と同様である。また、柱列は東端から北へ延びる可能性がある。

溝 56 (図 9、図版 7) 1 B - 1区東半部で検出した南北溝で溝幅 1.9 m、深さ 0.7 mである。南北 2.7 mにわたり検出した。溝の方位は真北に対して西に振れる。溝の断面形状はU字状である。埋土は 3層に分かれる。第 1層は暗褐色砂泥、第 2層は褐色砂泥、第 3層は褐色混礫砂泥で、いずれも土師器、須恵器、瓦が出土しており、小礫と炭片が混じる。

土壌 108 1 B - 2区西半部で検出した。幅 2～4 m、深さ 0.2 mで、調査区外の南に大きく広がる様相を呈している。埋土は暗褐色砂泥。炭片が多く含まれる。土壌内から土師器、瓦、鉄釘などが出土している。土壌低部は、地山の明褐色砂泥上面で、下層の砂礫層に達していないことから、土取り穴とみられる。

土壌 123 (図版 9) 1 B - 2区西半部の南壁際で検出した。大きく削平を受けている。残存規模は幅 1.7 m、長さが 1.4 m以上、深さが 0.22 m。調査区南外に延びる。埋土は暗褐色砂泥。炭片が多く含まれる。土壌内からは多くの土師器皿と須恵器片口鉢、瓦器、輸入陶磁器、鉄釘片などが出土した。土器の時期はいずれも 13世紀中頃とみられる。また北西に近接する土壌 172 で出土した須恵器大鉢と同一破片も出土しており、土壌 172 を削平後に、投棄されたと考えられる。

土壌 125 1 B - 2区土壌 123 に削平された状態で検出した。幅 1.7 m以上、長さ 1 m以上、

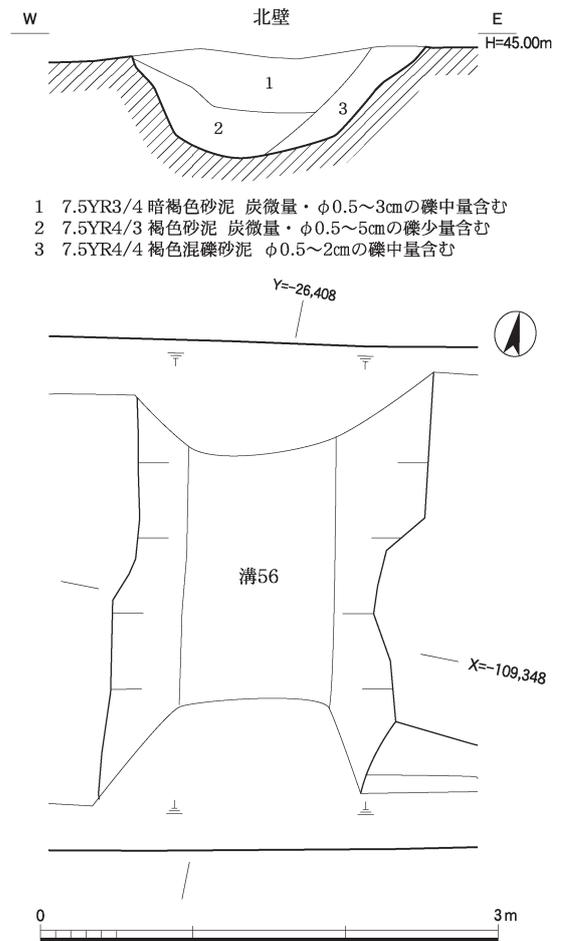
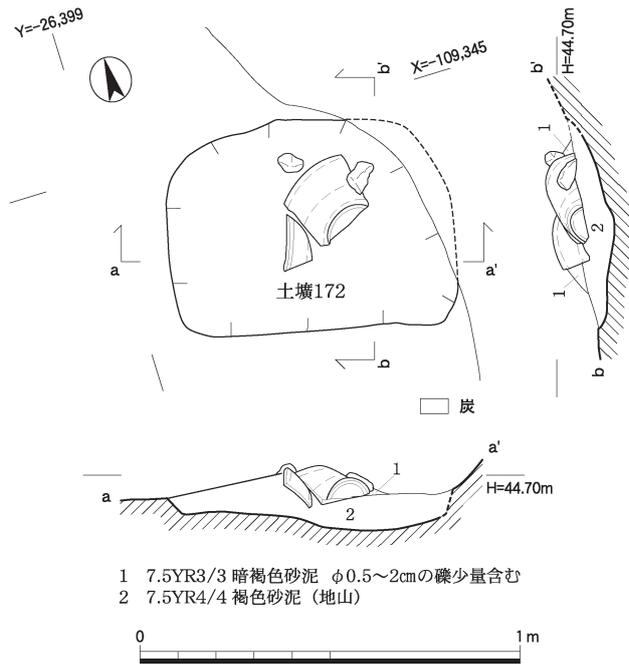


図 9 1 B - 1区溝 56 実測図 (1 : 50)



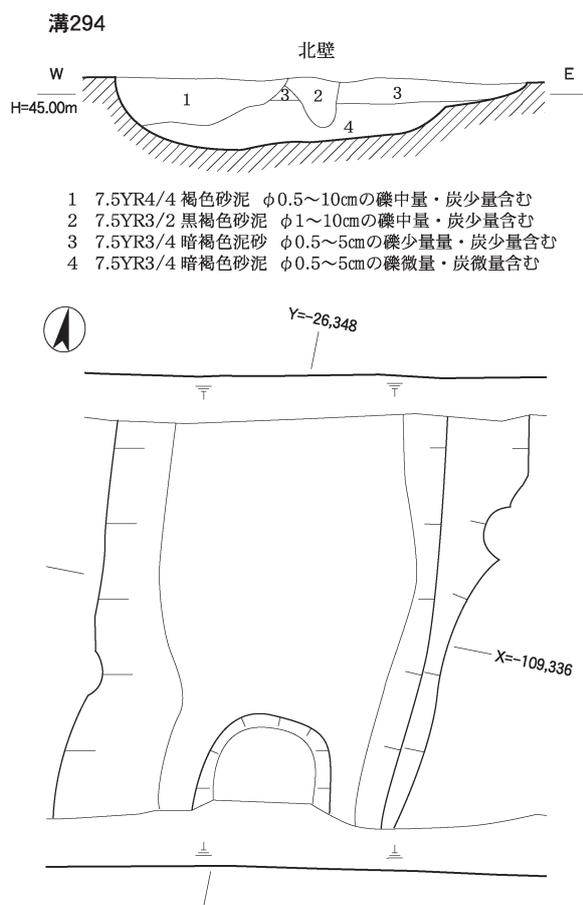
- 1 7.5YR3/3 暗褐色砂泥 φ0.5~2cmの礫少量含む
- 2 7.5YR4/4 褐色砂泥 (地山)

図10 1 B - 2区土壌 172 実測図 (1 : 20)

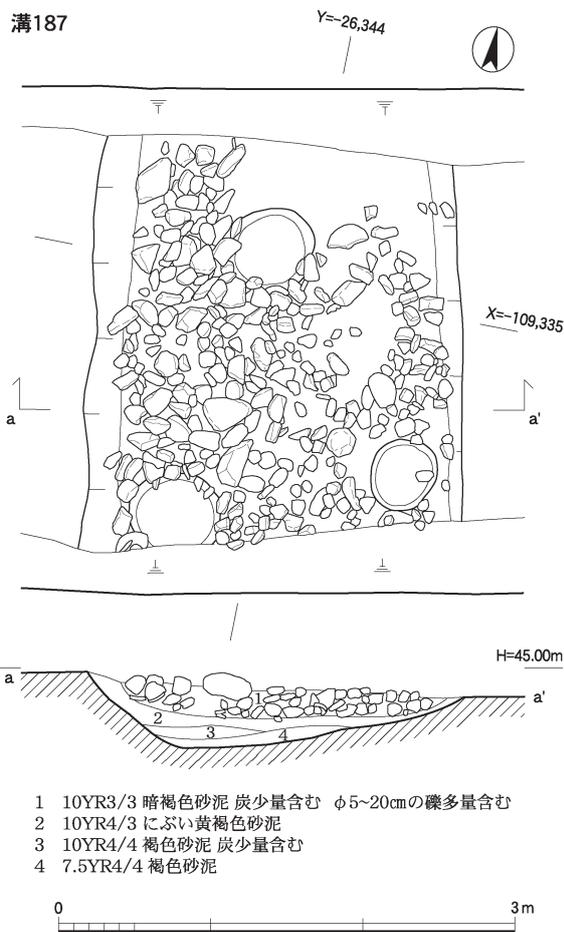
深さが 0.18 m で、調査区の南外に延びる。埋土は暗褐色砂泥。炭片を多く含む。土壌内から土師器、須恵器、瓦器、瓦、鉄釘が出土している。土壌 123・125 に連なった、廃棄土壌であろう。

土壌 153 1 B - 2 区の土壌 125 に東接して南壁際で検出した。幅 1.3 m、長さ 0.4 m 以上、深さ 0.2 m である。埋土は暗褐色砂泥で、炭片を含む。土壌内から土師器、須恵器、瓦器、輸入陶磁器、瓦、鉄釘などが出土した。

土壌 172 (図 10、図版 8) 1 B - 2 区西半部で検出し、土壌 123 の北西に近接する。土壌 108 に削平されている。須恵器大鉢が伏せられた状態で検出した。残



- 1 7.5YR4/4 褐色砂泥 φ0.5~10cmの礫中量・炭少量含む
- 2 7.5YR3/2 黒褐色砂泥 φ1~10cmの礫中量・炭少量含む
- 3 7.5YR3/4 暗褐色泥砂 φ0.5~5cmの礫少量量・炭少量含む
- 4 7.5YR3/4 暗褐色砂泥 φ0.5~5cmの礫微量・炭微量含む



- 1 10YR3/3 暗褐色砂泥 炭少量含む φ5~20cmの礫多量含む
- 2 10YR4/3 にぶい黄褐色砂泥
- 3 10YR4/4 褐色砂泥 炭少量含む
- 4 7.5YR4/4 褐色砂泥

図11 1 B - 3区溝 187・294 実測図 (1 : 50)

存規模は幅 0.55 m、長さ 0.75 m の長方形である。深さは 0.15 m。埋土は暗褐色砂泥で、炭を含む粘土ブロックが 3 箇所で見られた。焼骨は出土していないが、火葬墓の可能性が高い。

溝 266 (図 6) 1 B - 2 区東半部で検出した南北溝で、溝幅 1.9 m、深さ 0.65 m である。南北 2.5 m にわたり検出した。溝の方位は真北に対して西に振れる。溝の断面は U 字型。埋土は 5 層に分かれる。埋土からは土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦が出土している。

溝 187 (図 11、図版 10) 1 B - 3 区西半部で検出した南北溝である。溝幅は 2.4 m、深さ 0.4 m で、南北 2.5 m にわたり検出した。溝内の上層には径 0.05 ~ 0.2 m 大の礫が多量に詰まっていた。また礫間には軒瓦を含む瓦片も多く、土師器、須恵器、輸入陶磁器や滑石製の石鍋も出土している。また炭片や焼土も混入していた。礫面の下は 3 層に分かれる。上からにぶい黄褐色砂泥、炭を少量含む褐色砂泥、褐色砂泥である。

溝 294 (図 11) 1 B - 3 区西半部の溝 187 の西で検出した。南北方向の溝で幅 2.5 m、深さ 0.4 ~ 0.5 m で、南北 2.5 m にわたり検出した。埋土は 4 層に分かれる。上から褐色砂泥、黒褐色砂泥、暗褐色泥砂、暗褐色砂泥である。いずれも礫と炭を少量含む。溝内からは土師器、須恵器、輸入陶磁器、瓦などが出土している。

3) 近世の遺構

土壇 228 1 B - 3 区のほぼ中央部から東端にかけて大きく下がる土壇の肩部を検出した。規模は東西約 24 m で、肩部は標高 45 m、東端で 43.5 m と比高差は 1.5 m である。埋土は大きく 3 層に分かれ、上から灰黄褐色砂泥、暗褐色砂泥、黄褐色砂泥である。いずれも近世の染付陶器・磁器・瓦と銭貨「寛永通寶」が出土している。また中世の軒瓦・石製品も混入している。

(3) 2 区の遺構 (図版 3・4)

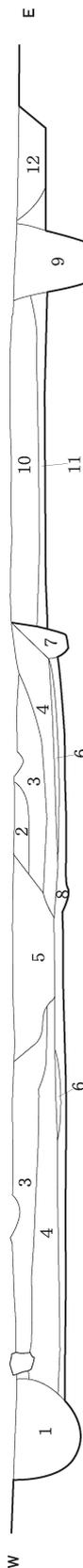
2 区で検出した遺構の総数は 346 基である。2 A 区で中世の土壇墓・溝などを検出している。2 B 区西半で中世末期の土取穴や土壇などを検出し、一段下がった東半で中世後半の火葬遺構・火葬墓や平安時代前期の溝などを検出している。2 C ~ D 区で弥生時代中期の竪穴住居、古墳時代後期の竪穴住居、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代前期の溝、平安時代前期までの柱穴などを検出した。

1) 弥生時代中期の遺構

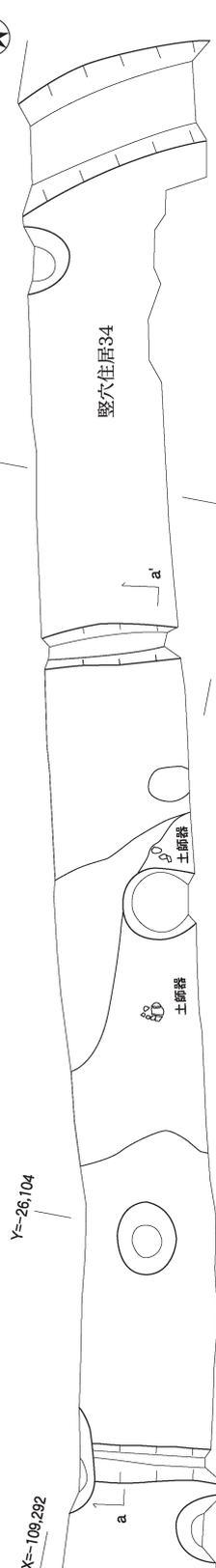
竪穴住居 34 (図 12、図版 15) 2 C 区で砂礫の地山を約 0.1 m 掘り込んだ弥生時代中期の竪穴住居 1 棟を検出した。この住居は飛鳥時代の竪穴住居 26 に大半が削平され、残存幅は約 3 m である。竪穴端部に幅 0.5 m ・深さ 0.15 m の円弧状の周溝を有し、竪穴住居の床は周溝に向かってやや高くなり床土と同じにぶい黄褐色泥砂で盛り上げてあった。埋土は黒色泥砂である。埋土から弥生時代第 II 様式初頭と考えられる弥生土器壺の破片を検出している。

竪穴住居26・34

H=43.80m



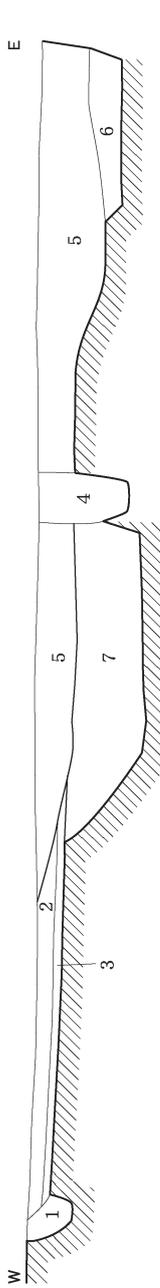
- 1 2.5Y 3/1 黒褐色砂泥
- 2 10YR 2/1 黒色砂泥
- 3 2.5Y 2/1 黒色砂泥
- 4 10YR 3/1 黒褐色砂泥
- 5 10YR 1.7/1 黒色砂泥
- 6 10YR 7/4 にぶい黄褐色精質土、焼土少量含む(竪穴26)
- 7 10YR 3/2 黒褐色砂泥(竪穴26)
- 8 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂泥(竪穴26)
- 9 10YR 1.7/1 黒色砂泥
- 10 10YR 3/1 黒褐色砂泥
- 11 10YR 5/4 にぶい黄褐色砂泥(竪穴34)
- 12 10YR 2/1 黒色砂泥(竪穴34)



- 13 10YR 2/3 黒褐色砂泥
- 14 10YR 3/1 黒褐色砂泥
- 15 炭
- 16 10YR 3/3 暗褐色砂泥
- 17 10YR 4/3 にぶい黄褐色砂泥

竪穴住居29・溝60

H=43.80m



- 1 10YR2/3 黒褐色砂泥(竪穴住居29)
- 2 2.5Y2/1 黒色砂泥(竪穴住居29)
- 3 10YR3/2 黒褐色砂泥(竪穴住居29)
- 4 10YR3/1 黒褐色砂泥
- 5 2.5Y2/1 黒色砂泥(溝60)
- 6 2.5Y4/4 オリーブ褐色砂泥(溝60)
- 7 10YR2/2 黒褐色砂泥(土壌61)

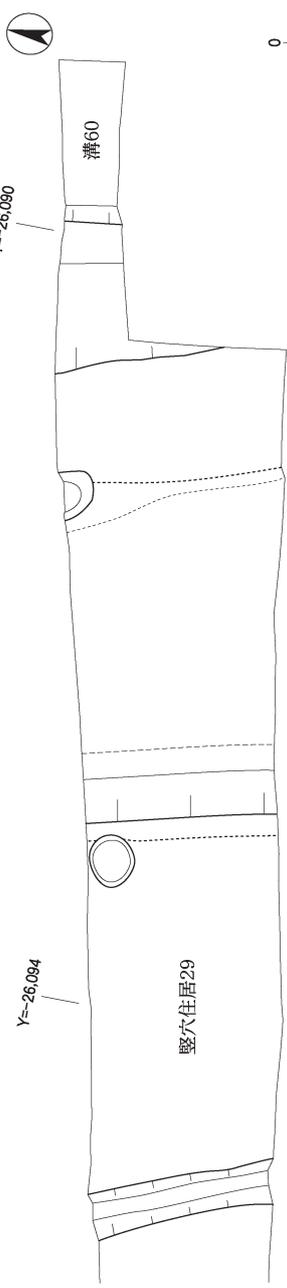


図 12 2 C区竪穴住居26・29・34、溝60実測図(1:40)

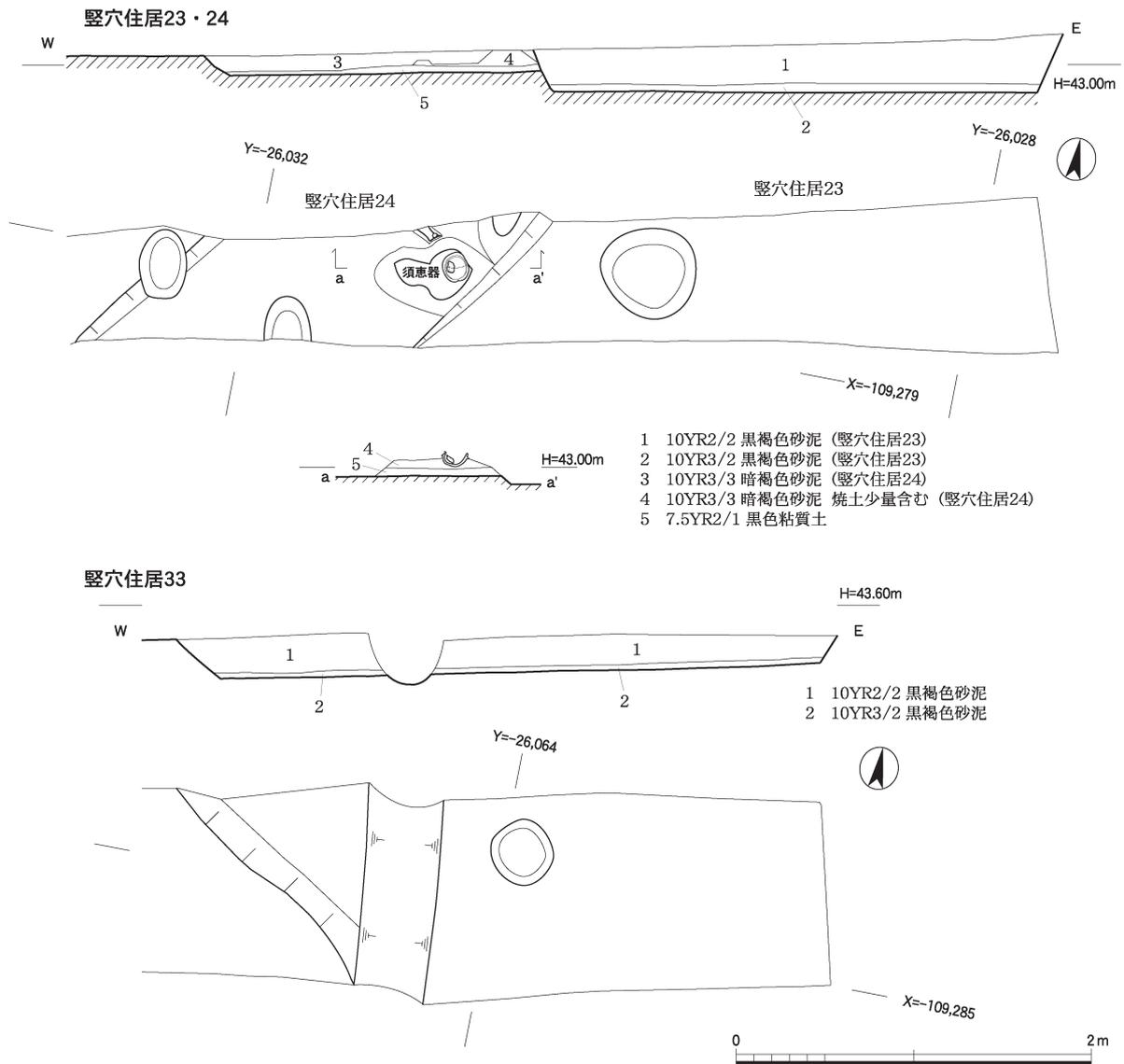


図13 2E区竪穴住居23・24、2D区竪穴住居33実測図(1:40)

2) 古墳時代後期の遺構

竪穴住居23・24・33(図13、図版15・17)古墳時代後期の方形竪穴住居を2E区から2棟(竪穴住居23・24)、2D区から1棟(竪穴住居33)検出している。これらの竪穴住居は地山の砂礫層を掘り込んで成立している。深さは竪穴住居23が0.15m、竪穴住居24が0.05m、竪穴住居33が0.13mである。竪穴住居24は0.1mほど深い竪穴住居23によって削平されている。竪穴住居23・24の主軸は東に40°振れ、竪穴住居33の主軸は東に35°振れているが、ほぼ並行に並んでいる。埋土も同じ黒褐色砂泥である。竪穴住居24には北壁に焼土を含んだ暗褐色砂泥の盛り上がりがありその上に完形の須恵器杯身が置かれていた。この盛り上がりを通り切ったが、カマドを示す痕跡はなかった。これらの竪穴住居には壁溝が見られず、壁もやや斜めに立ち上がっていた。また床は粘土ではなく埋土とほぼ同質の土が張ってあった。

溝1 2B区西半で検出した。北壁断面では逆台形の南北溝であるが途中で途切れている。溝内から古墳時代の土師器甕が出土しているので古墳の周溝の可能性もある。

落込み7 2 D区西半部から西壁にかけての深さ約 0.15 mの平坦な落ち込みで、古墳時代後期の須恵器や土師器カマド（移動式）を検出した。その他に混入品として弥生土器を検出している。埋土は黒色砂泥である。

3) 飛鳥時代の遺構

竪穴住居 26・29（図 12、図版 15） 飛鳥時代の竪穴住居を 2 C区から 2棟検出した。竪穴住居 29は深さ 0.08 mであるが、規模は東半部を溝 60によって削平されているため不明である。やや礫混じりの黒褐色砂泥の貼り床の下に幅 1.6 m・深さ 0.3 mの無遺物の黒褐色砂泥が堆積した土壇 61があるが性格は不明である。竪穴住居 26は一辺 4.5 mで深さは 0.15 mである。部分的に火熱を受けて変色したと考えるにぶい黄橙色の粘土が床にみられ、焼土が被さっていたので火災家屋の可能性がある。また床土を剥いだ後、1.8 m間隔で主柱穴 2基を検出したが、東側の柱穴には焼土や炭などが入っていたが柱痕跡はなかった。なお両竪穴住居の埋土は黒褐色砂泥で古墳時代の埋土と似ている。古墳時代後期の竪穴住居の方位が 35°～40°の振れがあるのに対し、飛鳥時代の竪穴住居は西に 17°～20°と振れが小さい。また古墳時代後期の竪穴住居には認められなかった壁溝が飛鳥時代の竪穴住居では明確に存在し、壁が垂直に立ち上がっていた。

落込み 15（図 17） 2 B区の高台東端の崖に掛かって検出したテラス状の落ち込みである。検出幅 0.8 mを測るが東部は中世初頭の開墾のため削平されている。深さは 0.2 mで西壁はほぼ真北方向に沿っており、壁に沿って杭が 4本打ち込まれていた痕跡がある。埋土には古墳時代の須恵器の他に飛鳥時代と考えられる土師器小片を検出している。一部に壁溝らしき溝が見られることや、底に粘り床とみられる粘質土層が観察されるため飛鳥時代の竪穴住居の可能性がある。

4) 平安時代前期の遺構

溝 16 2 B区北壁に掛かる断面が逆台形の南北溝である。土取穴 3によって大半は削平されているが、拡張区南壁に溝の痕跡はない。したがって南の拡張区に沿って L字状に東に曲がる可能性がある。遺物がなく時代は明らかではないが、中世堆積層の下に地山を切って成立しているので、飛鳥時代以前の遺構の可能性が高く、古墳の周溝の可能性もある。

溝 60（図 12） 2 C区竪穴住居 29東半部を切っている黒褐色砂泥が堆積した落ち込みであるが、2 C区東端を拡張した結果、さらに落ち込みがあり、オリーブ褐色砂が堆積しているため南北方向の流路の可能性が高い。この溝の東側に位置する 2 C区と 2 D区の間には現代の南北水路が存在する。

溝 124 2 C区西端で幅 4.5 m・深さ 0.5 mの南北方向の溝を検出した。上層と下層に分かれ、上層は暗褐色砂泥、下層は黒褐色砂礫である。両層から平安時代前期の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦などが出土した。

溝 12 2 B区東端に掛かった検出幅約 3.5 m・深さ 0.7 mの南北方向の黒色砂泥が堆積した流路である。東端は B区東端の壁に掛かっているため正確な幅は不明である。西岸から底にかけて

緩やかな傾斜があり、二段落ちになっている。埋土から弥生土器のほかに平安時代前期の土師器・須恵器の小片を検出している。なおB区とC区の間には現代の南北水路が存在する。

5) 鎌倉時代後半の遺構

溝 13 溝 12 の西 1 m に位置する幅約 1 m、深さ 0.1 m の南北方向の溝である。埋土から瓦器小片を検出している。

土壌 19 2 A 区北東隅の北壁と東壁際で検出した。規模は幅 1 m 以上、長さ 1 m 以上、深さ 0.6 m で、調査区外に延びる。埋土は暗褐色砂泥で、小礫と炭を含んでいる。土壌内から土師器、須恵器、焼締陶器の小片と、平安時代中期の軒平瓦（図 19）が出土している。鎌倉時代の土取穴の可能性はある。

土壌 20（図 14） 2 A 区のほぼ中央部で検出した。規模は南北 0.6 m、東西 0.55 m の楕円形で、深さが 0.3 m。断面の形状は、壁をほぼ垂直させ、底面は平坦である。埋土は黄褐色砂泥、灰黄褐色砂泥。底部には長さ 0.07 m 大の礫が二石みられた。土壌内から土師器、瓦のいずれも小片が出土した。

土壌 22（図 14） 2 A 区土壌 20 から東 2 m で検出した。規模は南北 6.5 m、東西 7 m の楕円形で、深さが 0.5 m。断面の形状は、壁をほぼ垂直させ、底面は平坦である。埋土は黄褐色砂泥、灰黄褐色砂泥。底部には長さ 0.2 m～0.25 m 大の礫が二石みられた。土壌内から土師器、須恵器、緑

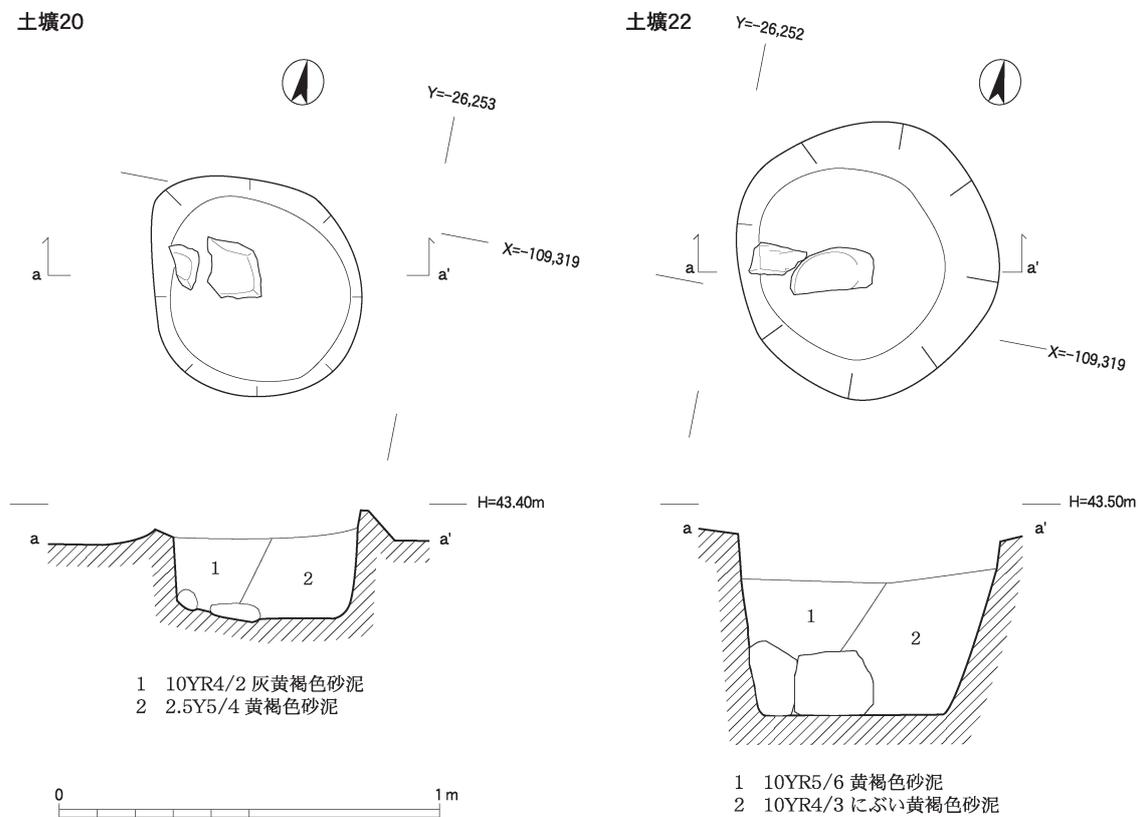


図 14 2 A 区土壌 20・22 実測図 (1 : 20)

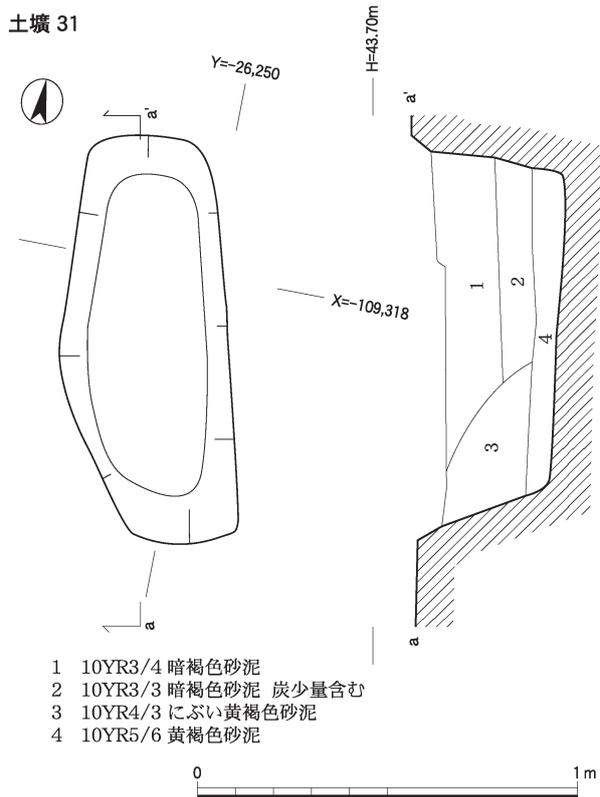


図 15 2 A 区土壙 31 実測図 (1 : 20)

可能なため正確な規模は不明である。土壙内には約 0.2 m 大の丸みのある扁平な川原石を、上面の高さを同じにして南側に二石、0.05 m 離れて北側に三石を二列に並べてあった。材質はチャート・砂岩・泥岩である。ボーリングステッキで北壁を探ったところ、北壁内に少なくともあと一列あることを確認している。土壙底部に並べてあった川原石は、全て火を受けて赤色に変色しており、取り上げの際割れたものもあった。黄白色シルトの地山を掘り込む土壙底部も炉跡のように約 3 cm 程橙色に変色しており堅く焼き締まっていた。また土壙周壁面も厚さ 1 cm 程橙色に変色していた個所があった。

土壙底部および石上に 22 本の鉄釘と火を受けた人骨を検出した。鉄釘は不規則な状態で出土し、法則性を持たないため木棺に使用された鉄釘が焼け落ちたものと判断した。人骨片の多くは石の隙間に多く残存しており、特に土壙北東隅の石の隙間の土壙底部からは、膝蓋骨 2 本と椎骨が 3 本繋がった状態で検出している。また土壙内には、ほぼ敷き石の高さまで灰と考えられる黒褐色の層が 0.12 m 堆積しており、図示できない細骨片を多く包含していた。この灰層は顕微鏡観察により稲藁が焼けたものであることが確認された。また小さな炭の破片が散発的に混入しており、顕微鏡観察から広葉樹が炭化したものであることが判明した。大きな炭片を検出していないことから粗朶などの細い枝を薪炭として使用した可能性がある。火力によって土壙底部および石がかなり変色していることや、出土した鉄釘の多さから、後述するように複数回の火葬がなされた可能性がある。ただし左右の膝蓋骨を 1 組検出しているので 1 体分は存在するが、複数体分あるのかは不明である。なお土壙東壁の傾斜部から上向きに置いた完形の 15 世紀代の土師器皿を検

釉陶器の小片が出土した。

土壙 31(図 15) 2 A 区土壙 19 の西 0.5 m で検出した。規模は幅 0.3 m、長さ 1.05 m の方形で、深さ 0.3 m。埋土は 3 層に分かれる。上から暗褐色砂泥、にぶい黄褐色砂泥、黄褐色砂泥である。いずれも小礫と炭を含む。

6) 室町時代後半の遺構

火葬遺構 1 (図 16、図版 13) 中世後半期の火葬場と考えられる土壙を 2 B 区の東北壁から調査最終段階で検出した。この土壙は中世の堆積層を掘り込んで成立しており、幅 1.1 m・深さ 0.3 m である。長さは北壁から南側に 0.55 m 分検出しているが、これ以上北に拡張することが不

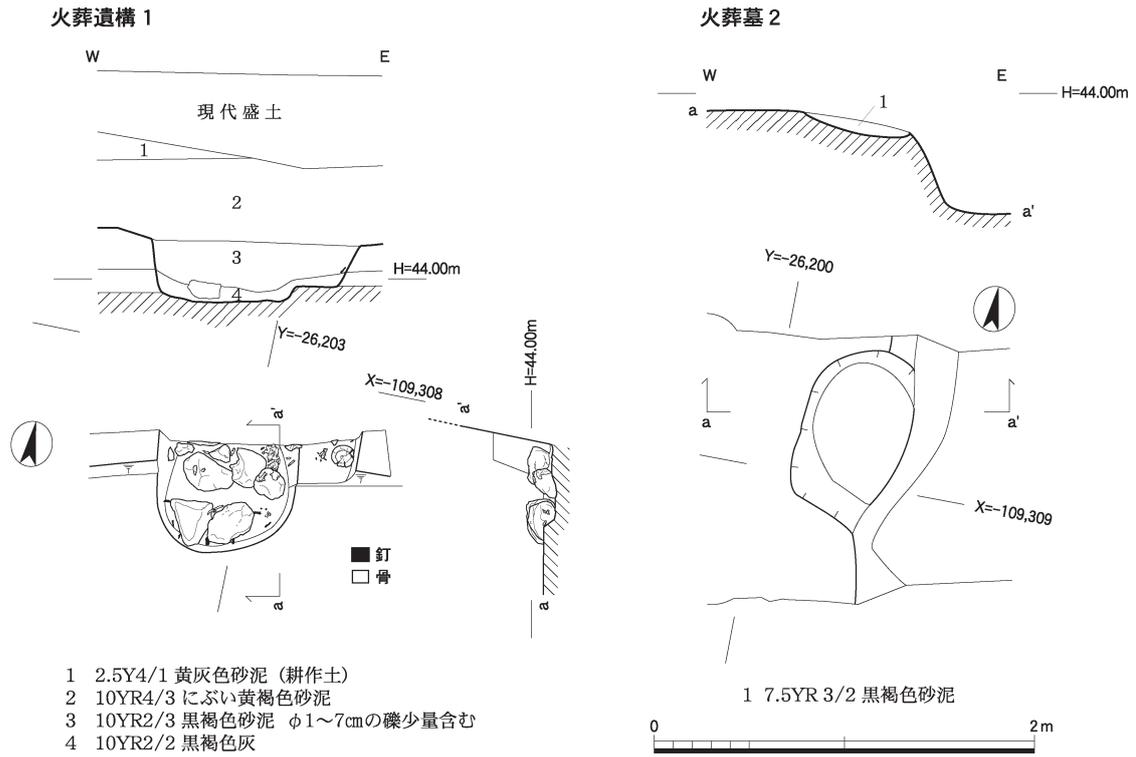


図 16 2 B区火葬遺構 1・火葬墓 2 実測図 (1:40)

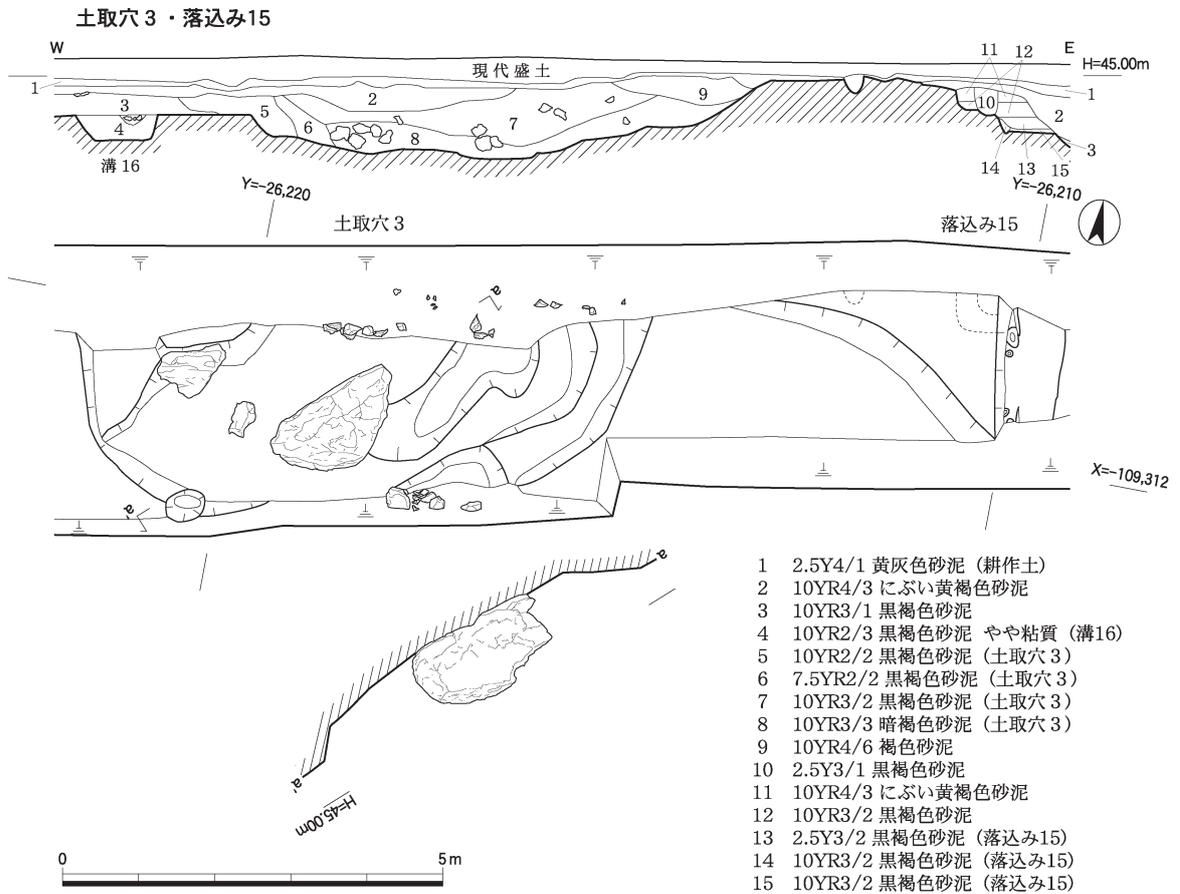


図 17 2 B区土取穴 3・落込み 15 実測図 (1:100)

出した。この土師器皿に火を受けた痕跡がないことから火葬後に埋納されたことが明らかである。したがって火葬場を最終的に墓としたものであると考える。

火葬墓 2 (図 16、図版 14) 前述した火葬遺構から東 4 m 地点で北壁に半分掛かって検出した。北壁断面観察によって火葬遺構と同じ面で成立していた。復元深は約 0.3 m である。近世の土壌 69 によって東端が掘り込まれているため、正確な規模は不明であるが、北壁拡張によって遺構検出面で径 0.8 m の円形の土壌であると推定できる。底に焼土・灰が約 0.1 m 堆積しその中から小片の人骨を検出した。

土取穴 3 (図 17) 2 B 区西部で、古墳時代から中世後半までの遺物が出土した東西約 7.5 m ・ 深さ約 1 m の土壌を検出した。この近辺の地山は精良な黄白色シルトであり、礫層を避けて掘っていることから、このシルト層を採取した土壌と考えられる。この土壌内には 0.1 ~ 0.5 m 大の珪岩 (変成チャート) が多量に投棄されていた。珪岩は 0.3 m 大に小さく割られているものが多い。ただし一石だけ平らな面を地山直上に垂直に立てた長軸 1.8 m、高さ 1 m ・ 厚さ 0.9 m を測る巨大な珪岩を検出した。当初は古墳の側壁・奥壁の可能性があったと考えたが、石の裏込めと推定した部分を断ち割った結果、底から 15 世紀代と考えられる瀬戸焼の椀を検出したことから、投棄された石であることが確認できた。また須恵器や石棺の一部と考えられる部材も、土取穴 3 内から出土している。近辺に位置する嵯峨野地域の古墳群の石室のほとんどに珪岩を用いていることから、古墳の石室に使用されていた可能性が高い。当地の北側には常盤東ノ町古墳群があり、また古墳時代の遺物を検出した溝 1 や土取穴 3 の北東部が丘状に盛り上がっていたことなどからも、古墳が存在していた可能性が高いといえる。

7) その他の遺構

柱穴群 調査区の幅が狭いため建物として復元できないが、平安時代前期までの径 0.3 m 前後を測る掘立柱建物などの柱穴を 100 基以上検出している。ただし遺物を含む柱穴は少なく、時代が確定できるのは C ・ D 区に集中してみられる平安時代前期の 2 C 区柱穴 18 ・ 24 ・ 25 ・ 40 ・ 59 や 2 D 区柱穴 4 ・ 5 ・ 14 ・ 19 ・ 23 ・ 30 ・ 34 などである。

(4) 3 区の遺構 (図版 1 ・ 17)

3 区の基本序層は現地地表下 0.2 m が碎石を含む盛土で、以下 1.1 m までが近・現代盛土である。その下は地山とみられる明褐色砂泥層がみられる。遺構検出はこの面で行った。検出した結果、近代の落ち込みが多く、東壁際に江戸時代の土壌 1 の北肩部を検出した。攪乱されており、残存長は南北 0.5 m 以上、東西は不明、深さ 0.4 m 以上。埋土は暗褐色砂泥。

4. 遺 物

出土した遺物は整理箱で 82 箱である。出土遺物の大半は 1 区から出土した土器類が主体で、全体では弥生時代から江戸時代までである。瓦類は鎌倉時代が多くを占める。その他の遺物として石製品、金属製品、土製品がある。以下、主要な出土遺物について、1 区と 2 区に分け概述する。

(1) 1 区の出土遺物 (図 18 ~ 20、図版 18・20)

出土した遺物は土器類、瓦類、石製品、金属製品がある。1 B 区で出土したものが大半である。時期は飛鳥時代と鎌倉時代の土器類が主体である。

飛鳥時代の土器類は、ほとんどが須恵器である。須恵器には杯蓋・杯身・杯・高杯・壺がある。杯蓋は天井部をヘラケズリし乳頭状つまみを付けるものが多い。杯は律令時代に盛行するいわゆる「杯 G」が多く占める。高杯、壺に古要素がみられるが、時期的には 7 世紀後半と推定される大阪陶邑古窯跡群の T K 48 形式に属する。また土器以外には竪穴住居 132 から滑石製の紡錘車と土製の土錘が出土している。

鎌倉時代の土器類は、土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、輸入陶磁器、国産陶磁器などがある。遺物の年代は出土した土師器皿から京都 VI 期中～新に属し、13 世紀中頃～後半の年代に収まる。ここでは遺構でまとまって出土した土器類を中心に、軒瓦・石製品・金属製品についても概述する。軒瓦は 1 区で出土したものが大半で、2 区では 1 点出土している。内訳は軒丸瓦 4 点、軒平瓦 8 点である。時代別にみると平安時代中期から鎌倉時代までである。石製品は鍋と砥石がみられる。金属製品は鉄釘が土壌から多く出土している。溝・遺物包含層からも出土しているが少量である。

表 3 遺物概要表

時 代	内 容	コンテナ箱数	A ランク点数	B ランク箱数	C ランク箱数
弥生時代	弥生土器	1 箱	弥生土器 4 点	1 箱	0 箱
古墳時代	土師器、須恵器、石材	3 箱	土師器 1 点、須恵器 6 点、石材 2 点	2 箱	0 箱
飛鳥時代	須恵器、石製品、土製品	4 箱	須恵器 14 点、石製品 1 点、土製品 1 点	3 箱	0 箱
平安時代	須恵器、灰釉陶器、軒瓦	1 箱	須恵器 4 点、灰釉陶器 1 点、軒平瓦 1 点	1 箱	0 箱
鎌倉時代	土師器、須恵器、瓦器、輸入青磁、石製品、軒瓦、金属製品	54 箱	土師器 9 点、須恵器 4 点、瓦器 1 点、輸入青磁 3 点、石製品 4 点、軒丸瓦 4 点、軒平瓦 7 点、金属製品 9 点	50 箱	0 箱
室町時代	土師器、瓦器、施釉陶器、金属製品、骨	22 箱	土師器 2 点、瓦器 1 点、施釉陶器 1 点、金属製品 23 点、骨 5 点	20 箱	0 箱
近 世	土師器、施釉陶器、染付、銭貨	2 箱	銭貨 1 点	0 箱	2 箱
合 計		87 箱	109 点 (8 箱)	77 箱	2 箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、A ランクの遺物を抽出したため、出土時より 5 箱多くなっている。

ほとんどが全面に錆を付着させ腐食が進んでいた。中世のものばかりである。また近世の遺物としては銭貨「寛永通寶」が出土している。

1) 飛鳥時代の遺物 (図 18、図版 18)

須恵器杯蓋 (1~7) 1・3は天井部が平坦で、内面に返りをもつ。いずれもつまみは欠損している。口縁端部は下方に突出する。内外面ともロクロナデを施す。天井部が欠損しているが4も類似したタイプである。口径・器高は1が10 cm・1.4 cm以上、3は11 cm・1.8 cm以上、4は16 cm・2 cm以上。いずれも色調は灰白色を呈し、焼成は堅緻。1は1 B - 2区溝 266、3は1 B - 3区土壙 317、4は1 B - 2区竪穴住居 409から出土した。

2は天井部を欠くが、小型で丸みをもつ。内外面ともにロクロナデを施す。口径・器高は10.6 cm・2.7 cm。色調は灰白色を呈し、焼成は堅緻。1 B - 2区土壙 101から出土した。

5は天井部外面を丁寧にヘラケズリし、ほかは内外面ともにロクロナデを施す。天井部外面の中央に宝珠つまみがつくタイプである。口縁部内面の返り先端は鋭く、口縁端部より下方に突出する。口径・器高は14 cm・3.7 cm以上。色調は灰白色を呈し、焼成は堅緻。1 B - 2区竪穴 132から出土した。

6は天井部外面を丁寧にヘラケズリし、中央部につまみがつく。ほかは内外面ともにロクロナデを施す。外面肩部に一条の凹線が巡る。口縁部に焼けひずみがみられる。口径・器高は16.3 cm・5.1 cm。色調は灰白色を呈する。焼成は堅緻。1 B - 2区土壙 177から出土した。

7は天井部外面にヘラ記号「×」がみられる。口径・器高は9.4 cm・3.0 cm。1 B - 2区竪穴住居 132から出土した。

須恵器杯 (8~11) 8~11は平坦な底部と外傾して立ち上がる体部からなり、口縁端部は外反し丸くおさめる。いずれも口縁部内外面はロクロナデ調整を施す。底部外面は8・9・11はヘラケズリ調整を施すが、10はヘラ切り痕を残し、未調整である。口径・器高は8が10 cm・3.6 cm、9は9.2 cm・3.6 cm、10は10 cm・4.2 cm以上、11は10 cm以上・3 cm以上である。色調はいずれも灰白色で、焼成は堅緻である。8は1 B - 3区溝 294、9は1 B - 2区竪穴住居 409、10は1 B - 2区溝 266、11は1 B - 2区竪穴住居 382から出土した。

須恵器高杯 (12) 無蓋高杯の脚部から杯底の一部とみられる。脚部は短く、裾部は広がる様相を呈している。方形の透しが一段2方向にみられる。残存する杯低部は外面調整に粗いヘラケズリがみられる。内面には緑灰色の自然釉が厚く付着する。脚部は内外面ともにロクロナデを施している。色調は灰白色である。焼成は不良。1 B - 2区土壙 378から出土した。

須恵器壺 (13) 短頸壺の肩部から体部上半の破片とみられる。外面には凹線文で区画した内に粗雑な波状文を施す。内外面はロクロナデ調整による。色調は灰白色である。焼成は堅緻。1 B - 3区溝 294から出土した。

紡錘車 (35) 滑石製の紡錘車である。全体の3/4ほど残存する。低い円錐台形で、径4.1 cm、高さ1.8 cmである。孔径0.6 cmあり、上部から穿孔したと思われる。表面には細い文様の痕跡があり、

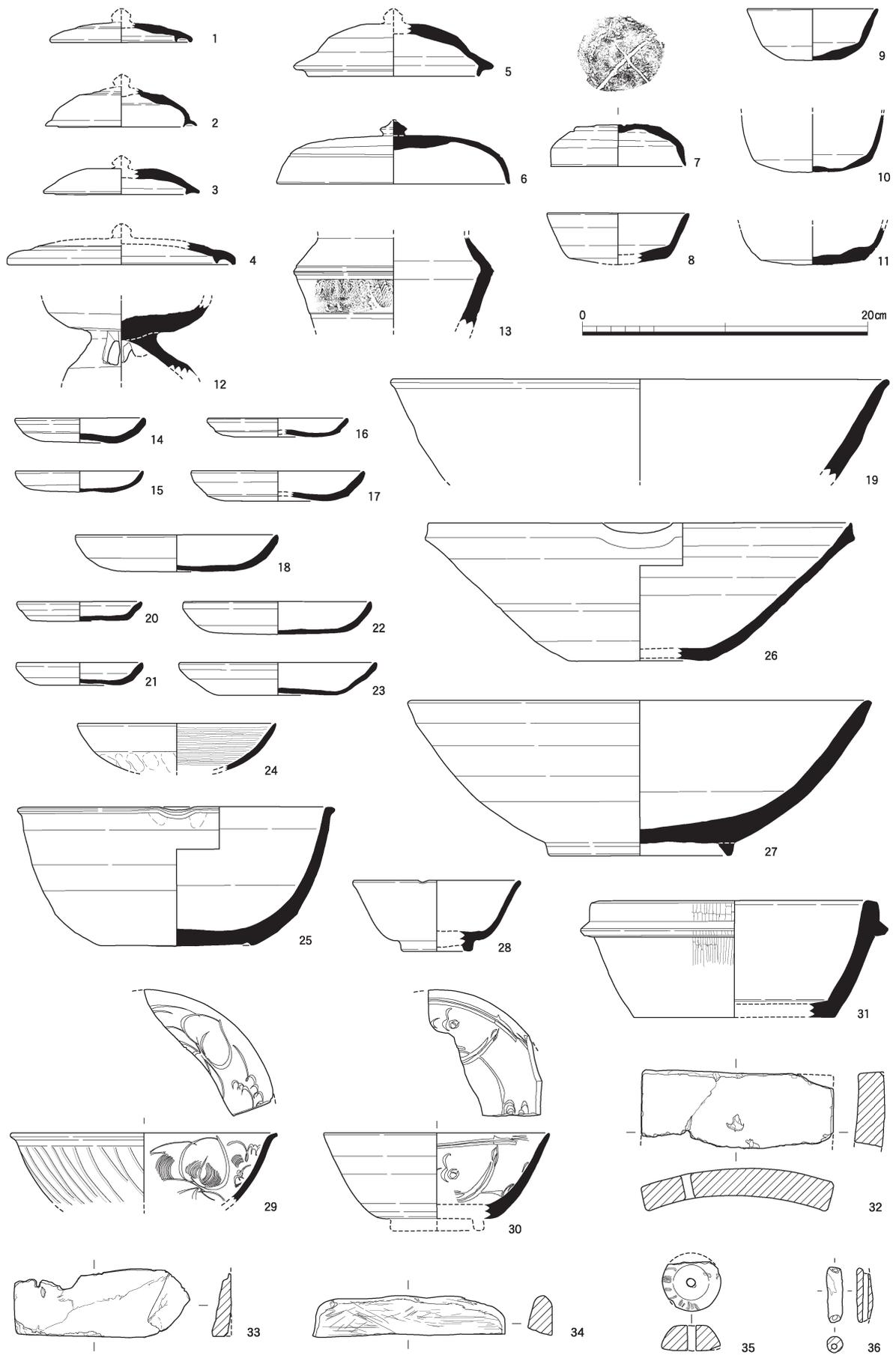


图 18 1区出土遗物实测图(1:4)

擦り消されている。裏面は平坦で文様はない。色調は緑灰色で各面とも研磨され光沢がある。1 B - 2区竪穴住居 132 から出土した。

土錘 (36) 長さ 3.8 cm、径 1.1 cm である。孔径は 0.4 cm で、内面は平滑となっている。胎土は砂粒を多く含む。焼成は不良である。色調は灰白色を呈している。1 B - 2区竪穴住居 132 から出土した。

2) 鎌倉時代の遺物 (図 18、図版 18)

土師器皿 (14 ~ 18・20 ~ 23) 14 ~ 18 は 1 B - 2区土壙 125、20 ~ 23 は 1 B - 2区土壙 123 から出土した。土師器皿には小型と大型がある。14 ~ 16・20・21 は小型皿で口径 8.8 ~ 9.0 cm、高さ 1.5 cm 前後である。17・18・22・23 は大型皿で口径 13.2 ~ 14.2 cm、高さ 2.3 cm 前後である。いずれも白色系に属し、体部は内湾気味に立ち上がり口縁部はそのまま収める。口縁部の横ナデは、すべて一段ナデである。22・23 の口縁端部は一段ナデの上外側に面をもつ。

瓦器椀 (24) 1 B - 2区土壙 123 から出土した口縁から体部の破片である。口径 14 cm、器高 3.5 cm 以上である。内面のみヘラミガキを施す。口縁部は横ナデ調整、体部外面下半は指オサエの痕跡が残る。楠葉産とみられる。

須恵器鉢 (19・25 ~ 27) 19 は口縁・体部の破片で、口径 35 cm で器高は不明である。体部は外上方に延び、口縁端部はそのまま収める。体部の内外面ともに横ナデ調整である。色調は灰白色で、焼成は堅緻である。1 B - 2区土壙 125 から出土した。

25 は片口の鉢で口径 22.2 cm、器高 9.8 cm。体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部は外方につまみ出す。体部は内外面ともに横ナデを施し、体部外面の下半と底部外面はケズリで成形し、浅く高台を削り出している。また底部内面は使用により平滑化している。色調は浅黄橙色で、焼成は堅緻である。東海系の製品とみられる。1 B - 2区土壙 123 から出土した。

26 は口径 30 cm、器高 9.7 cm である。体部は底部から内湾気味に立ち上がり、斜め上方に直線的に延びる。口縁端部は上下につまみ出し、端面に凹面をもつ。体部内外面ともに横ナデを施すが、底部外面は指オサエの痕跡が残る。内面底部は使用により平滑である。色調は灰色で、焼成は堅緻である。東播系の製品。1 B - 2区土壙 123 から出土した。

27 は口径 32.6 cm、器高 10.9 cm である。体部は底部から内湾気味に立ち上がり、斜め上方に直線的に延びる。口縁端部はやや角張る。体部内外面ともにロクロナデを施す。体部下半はヘラケズリを施す。底部外面には高台を貼り付け、ヨコナデで調整している。底部内面は使用により平滑化している。色調は内側は黄灰色、外側は灰白色である。焼成は堅緻である。いずれも 1 B - 2区土壙 172 から出土した。

輸入陶磁器 (28 ~ 30) いずれも龍泉窯の製品とみられる青磁椀で、1 B - 2区土壙 153 から出土した。28 は小型の青磁椀で口径 11.8 cm、器高 5 cm である。体部は斜め上方に立ち上がり、端部は丸く収める。高台は削り出して台形状。浅黄橙色の釉を高台外面にまで施している。内面の見込みには沈線で段をつけている。胎土は精良で褐色を呈する。29 は口径 18.8 cm、器高は 5

cm以上の椀である。体部は内湾しながら斜め上方に立ち上がり、口縁部は外に折れ曲がり端部はやや角張る。内面には草花文が、外面は斜め方向に連弁状の文様が密に描かれ、濃緑色の釉が施されている。胎土は精良で灰白色を呈する。30は口径15.8cm、器高6cm以上の椀である。体部は斜め上方にナデ立ち上がり、口縁端部は尖り気味である。内面には草花文が描かれている。外面には濃緑色の釉が施されている。胎土は精良で灰白色を呈する。

石製品(31～34) 31は滑石製の石鍋である。口径は20cm、器高8.3cmである。底部は平底で体部は外上方に延び、口縁は水平に収める。外面の口縁下には鏝が巡り、瓦器羽釜と同じ形態を呈する。外面の成形には鱗状の単位がみられ、ノミで成形された痕跡と思われる。また外面下半部には煤が付着している。1B-2区の遺物包含層から出土した。

32は滑石製の温石である。幅5.3cm、長さ13.5cm、厚さ2.1cmで、平面は長方形、側面は弧状をなす。石鍋の口縁部を再利用し、製品としたものである。表面は平滑化している。また小孔が1孔穿たれているのが確認できる。1B-3区溝187から出土した。

33・34は砥石で、33は幅2.8cm以上、長さ13.5cm以上、厚さ1.5～2cmで、形状は不明。石材は珪質頁岩である。表・裏面ともに平滑で、細かい使用痕が残る。34は幅4.8cm、長さ12.3cm、厚さ1.3cmで、長方形とみられる。破損しているが擦面が一部残存し、面取りされた隅部も残る。石材は珪質粘板岩である。いずれも1B-3区の遺物包含層から出土した。

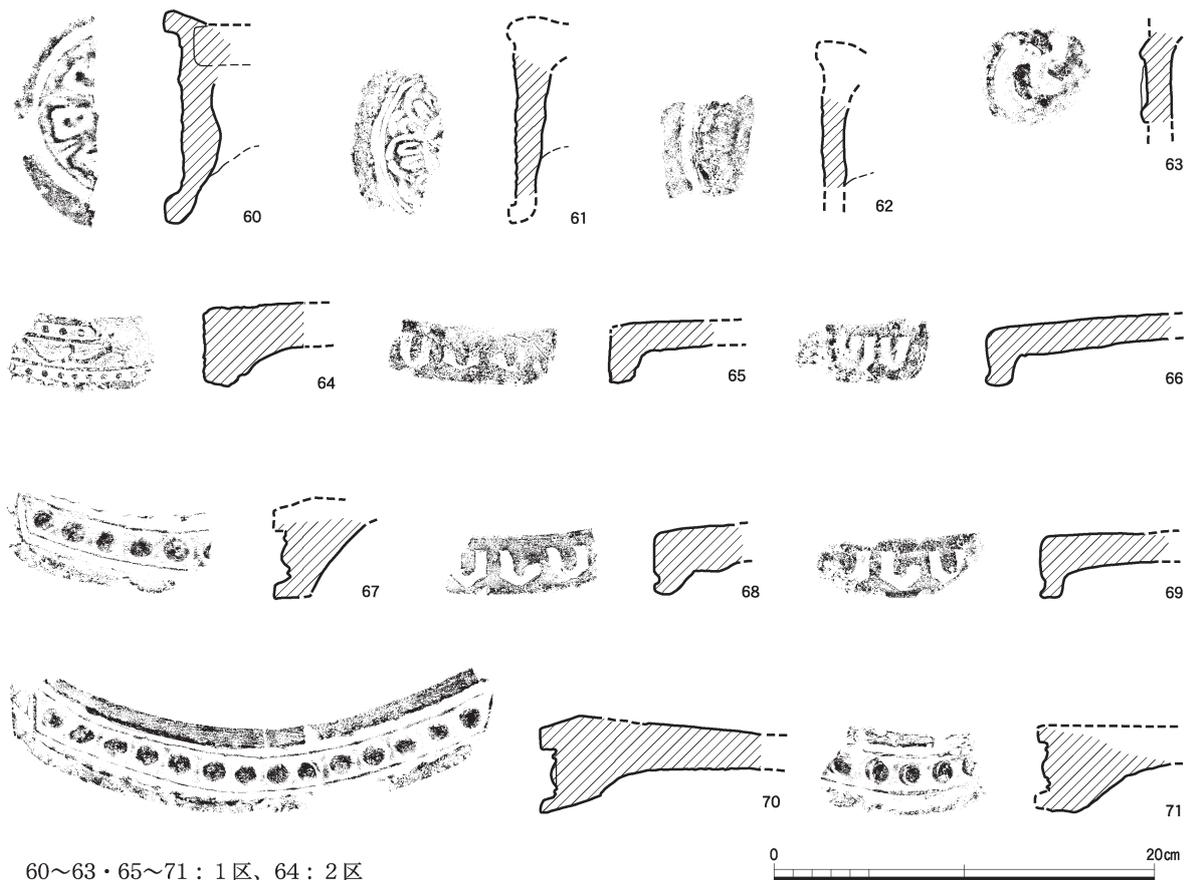
3) 軒瓦(図19)

単弁八葉蓮華文軒丸瓦(60) 花卉は角張り、弁子は長方形で比較的大きい。弁間文は先が尖った単線で表現される。花文と周縁の間に圈線を巡らす。瓦当部側面はナデで仕上げる。瓦当部裏面上部に丸瓦を当てて粘土を付加して接合している。胎土は砂粒多く粗い。色調は灰白色。焼成は堅緻。1B-3区土壙228から出土している。山城産とみられる。平安時代後期。

複弁六葉蓮華文軒丸瓦(61・62) 複弁の間に単葉花卉を覗かせる。花卉と周縁の間に細い圈線を巡らす。胎土は61・62ともに精良。色調は61は灰黒色で焼成はやや軟質、62は灰白色で焼成は軟質である。61は1B-3区土壙228、62は1B-3区溝187から出土した。いずれも山城産。平安時代後期。

三巴文軒丸瓦(63) 巴文の中心部の破片である。巴は浅く平坦で、頭部は右回り。胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は灰白色で焼成はやや軟質である。1B-3区土壙228から出土した。山城産とみられる。

剣頭文軒平瓦(65・66・68・69) 68以外は瓦当端部が残存している。65・68・69は単位文様が大きく、全体に単位文様を6個置くタイプで、66は左右に単位文様を4個ずつ割り付け、中心飾りを置くタイプとみられる。瓦当部は平瓦広端部を折り曲げて成形する。また65・68・69は瓦当部の平瓦部凹面広端縁を面取しているが、66は布目が残る。顎部はいずれもナデ調整を行っているが、66の顎部裏面には瓦当面を折り曲げる際に付いた布目圧痕が残る。胎土はいずれも小礫・砂などを含み粗い。色調は65・69は灰黒色で焼成はやや軟質。66・68は灰白色で焼成は堅



60～63・65～71：1区、64：2区

図19 1区・2区出土軒瓦拓影・実測図（1：4）

緻。65・68は1B-3区土壙228、66は1B-3区溝187、69は1B-2区土壙108から出土した。いずれも山城・栗栖野瓦窯産。平安時代後期。

連珠文軒平瓦（67・70・71）67は左端部の破片、70はほぼ全体が残存、71は左端部に近い破片である。珠文を14個置き、周りに圈線が巡る。平瓦部凹面はケズリによる調整で、瓦当面および平瓦部凹面には離れ砂が付着している。顎部は貼り付けにより製作されている。顎部裏面はやや内湾気味のカーブを描く。いずれも胎土は砂粒を含むが精良、色調も灰黒色で焼成は堅緻。67は1B-3区土壙228、70・71は1B-3区溝187から出土した。いずれも和泉産の製品。鎌倉時代前半。

4) 金属製品（図20）

鉄釘（72～78）大きさは大・小があるとみられる。破損しており全長が不明であるが、74・75・78などは長さ5～7cmほどが残存していることから長いタイプとみられる。他は2～3cmが残存しており、その2倍以内とみられる。頭部の形態は72・74の残存形から方形の角釘と考えられる。断面形は長方形を呈するものが多い。72・75は1B-2区土壙108、73は1A区土壙91、74は1B-2区土壙153、76・78は1B-2区土壙123、77は1A区土壙74から出土した。

鉄製品（79・80）79は断面が方形で、長さ6cm残存する。1A区土壙91から出土した。

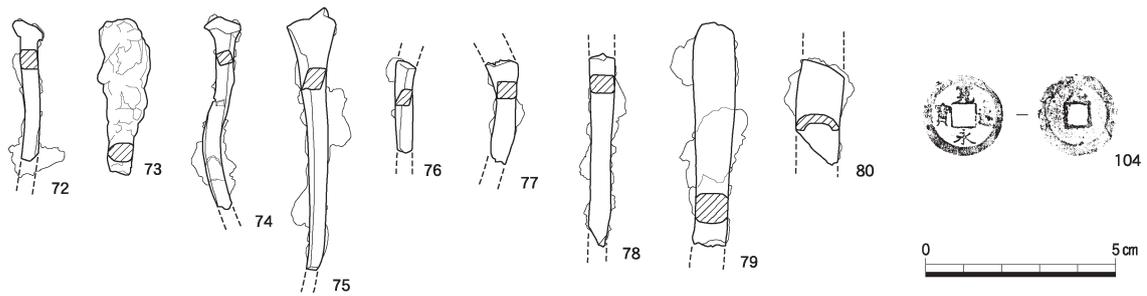


図 20 1区出土鉄釘・鉄製品実測図、銭貨拓影（1：2）

80はやや湾曲している。1 B - 2区土壙 125 から出土した。

銭貨（104）銅製鑄造で円形方孔の銭貨である。直径 2.2 cm、孔径 0.6 cm。表面は上下左右の順に「寛永通寶」と記す。裏面には上部に「元」一字を配す。いわゆる新寛永で、寛保年間（1741～1744年）に鑄造したとされる。1 B - 3区土壙 228 から出土した。

（2）2区の出土遺物（図 19・21・22、図版 19・20）

2区からは1区で出土しなかった弥生時代中期・古墳時代後期・平安時代前期の遺物が出土している。飛鳥時代から近世までの遺物も出土しているが量的には1区より少ない。また1区の土壙墓では検出できなかった火葬骨が出土している。

1）弥生時代の遺物（図 21）

弥生土器（37～40）弥生土器は2 B区以東で散発的に出土しているが、図化できるのは4点に留まる。2 C区竪穴住居 34の埋土から出土した37は、弥生時代中期前半（第Ⅱ様式）の可能性が高い壺である。頸部に3条を単位とする櫛描文を廻らす。器厚は約1 cmで厚い。器表面は両面とも肌色であるが内面は黒化している。胎土にチャートと石英の粒が混入している。38・39は高杯端部と考えられるが小片なので詳細な時代確定はできないが、外面沈線の在り方から見て37より後出のタイプである。胎土・調整などは37に似る。38は平安時代の2 B区溝 12から出土し、外面端部と腰部に2本の沈線を廻らす。39は外面端部に1本の沈線を廻らす。40は壺か甕の底部で平底である。底部と内面は黒色で体部外面が肌色である。39・40は古墳時代後期の遺物を検出している2 E区落込み 7から出土した。出土した弥生土器に時期幅がみられることから弥生時代集落が一定期間存続した可能性が高い。

2）古墳時代の遺物（図 21、図版 19）

土師器カマド（42）2 E区落込み 7から41と共伴して出土した移動式のカマドである。煙返し（庇）部分と考えられる。幅は8 cmで片面に煤が付着した使用痕が残る。またカマド本体部に接合した部位には剥離の痕跡が残る。焼成は良好である。

須恵器杯（41・44・45）41は2 E区竪穴群西の落込み 7から移動式の土師器カマド片と共伴

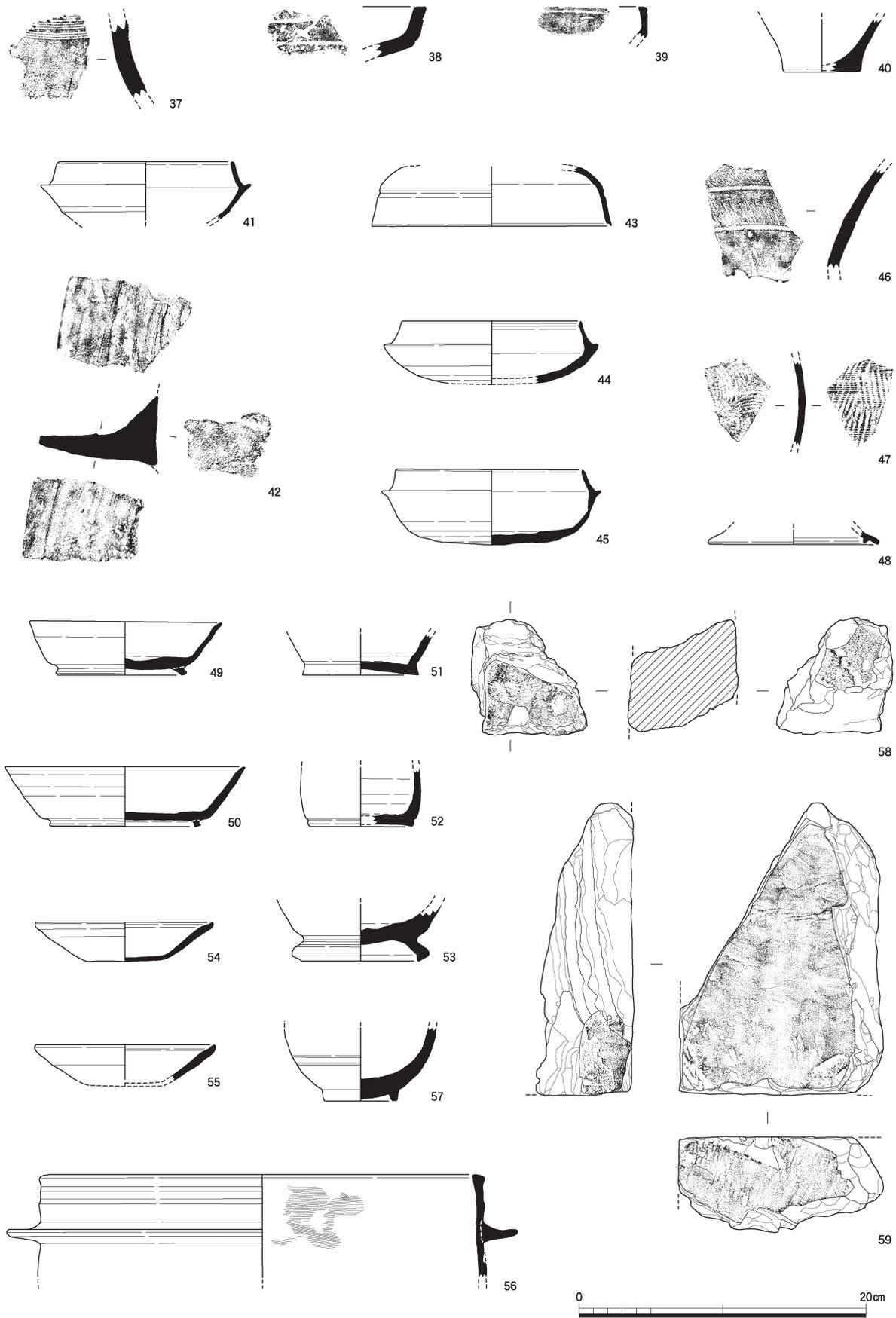


图 21 2区出土遗物实测图(1:4)

して出土した。底部残存部にヘラケズリ跡がないので高杯の可能性はある。焼成は硬い。6世紀代のものであろう。

44は竪穴住居24を切っている2E区竪穴住居23の埋土から出土した。口径推定値12.5cm、高さ4.5cmである。外面底は丁寧な回転ヘラケズリである。焼成は硬い。45より浅底で、新しい要素をもつ。

45は口径13cm、高さ5.4cmを測る。大型・深底でやや内向する長い立ち上がり部を有する。外面底は丁寧な回転ヘラケズリ。焼成は甘く淡灰色を呈する。2次焼成の可能性はある。6世紀代に比定できる。2E区竪穴住居24の焼土の盛り上がり部に上向きに置かれていた完形の須恵器杯で竪穴住居廃絶期を示す。

須恵器杯蓋(43) 2B区落込み15の埋土から出土した。推定口径は16.8cmを測る。肩部に強い稜線を有する。次に述べる土取穴3から出土した46・47と同様に近在した6世紀代の古墳に伴うものの可能性がある。

須恵器壺(46) 2B区落込み15の西に位置する中世の土取穴3から出土した頸部破片である。2本の沈線の上に細かい単位の波状文を廻らす。

須恵器甕(47) 同じく2B区土取穴3から出土した体部破片である。表はタタキ目の上から横方向に細かいカキ目を施している。

石材(58・59) 石棺片の可能性のある石材で、石室石材が出土した中世後半の2B区土取穴3で2石検出した。石材(59)は、長さ23cm・幅15cm・厚さ5cmである。隅部分となる表面と側面が鑿かチョウナ状の道具で平坦に仕上げられており、幅約1cm・長さ約2cmを単位とする同一方向の加工痕も明瞭に残存している。また側面の一部には石棺を破壊する際に生じたと考えられる粗いピッチ状の痕跡がある。厚さは不明である。石材(58)は、両面に加工痕があり厚さが7.5cmである。ただし内面と考えられる部分の加工面は外面より粗い。神戸市近郊で産出する神戸層群の混成凝灰岩の可能性が高く、西神から茨木にかけて存在する古墳の石棺に使用された例が多い。ただし現時点で京都市内では確認例がない。隅部の加工面の残存状況から家型石棺か組み合わせ石棺の可能性はある。伴出した43・46・47などの須恵器から6世紀代のものとみられる。

3) 飛鳥時代の遺物(図21)

須恵器杯蓋(48) 2C区竪穴住居29の埋土から出土した小片である。口縁部内面のかえりの高さが低い。焼成は良い。宝珠つまみが付くタイプで、7世紀後半代のものであろう。

4) 平安時代の遺物(図21、図版19)

須恵器杯(49・50) いずれも2C区溝124から出土した。貼り付け高台が付く。黒褐色砂泥の上層から出土した口径13.4cm、器高3.8cmで小型の(49)は底に凹凸があり、底部に回転ヘラ切り跡が残る。下層の砂層から出土した口径16.6cm、器高4.2cmで大型の50は底の切り離し跡がなく、平坦である。いずれも平安時代前期のものである。

須恵器壺 (51・53) 51 は 2 C 区溝 124 から出土した。底部破片で糸切り痕が残存する。平安時代前期のものである。

53 は 2 C 区柱穴 40 から出土した。外反する太い高台を貼り付けている。時期は平安時代前期である。

灰釉陶器壺 (52) 2 C 区溝 60 から出土した。底部は糸切り平底であるが、体部外面に沈線を廻らすことによって疑似高台となっている。内面底に灰釉が掛かる。平安時代前期のものである。

5) 室町時代の遺物 (図 21、図版 19・20)

土師器皿 (54・55) 54 は 2 B 区火葬遺構 1 に上向きに埋納された完形の土師器皿である。口径 12.5 cm、器高 2.8 cm である。この遺構から出土した土師器皿はこの 1 点のみである。時期は 15 世紀後半である。

55 は 2 B 区土取穴 3 から出土した。口径 12.5 cm、推定高 3 cm である。火葬遺構 1 出土の土師器皿 (54) と同時期に比定できる。

瓦器羽釜 (56) 2 B 区土取穴 3 から出土した。鏝より上が長く直立している。内面は横方向のハケ目がある。

施釉陶器椀 (57) 2 B 区土取穴 3 で出土した石室石材の底付近で検出された緑灰色の釉薬が掛かった瀬戸産の施釉椀である。口縁部を欠いているが、胎土は灰色で粗く高台裏まで全体に釉薬を掛ける。底部内面の 1 箇所にトチンを置いた痕跡がある。55～57 は 2 B 区土取穴 3 の上限を示す遺物で、いずれも 15 世紀代のものである。

6) 軒瓦 (図 19)

唐草文軒平瓦 (64) 唐草文は両側から中心に展開する。主葉は連続して緩やかに反転し、支葉は巻き込む。外区には珠文が密に巡る。曲線顎。瓦当部凸面には布目が残る。顎部凸面と側面はヨコケズリ。裏面はオサエ。胎土は砂粒を多く含み粗い。色調は暗灰色で焼成は堅緻。2 A 区土

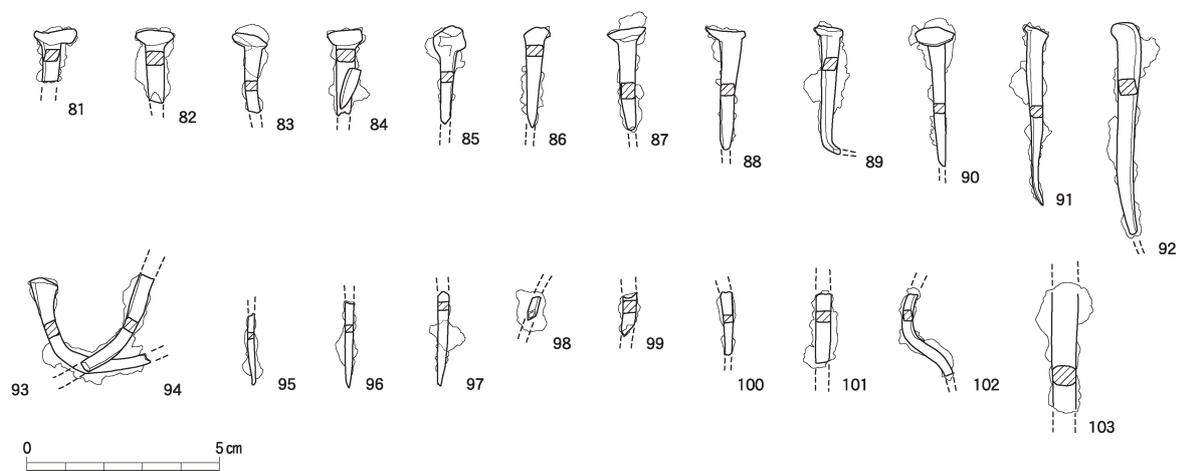


図 22 2 B 区火葬遺構 1 出土鉄釘実測図 (1 : 2)

壙 19 から出土。森ヶ東瓦窯産とみられる。平安時代中期。

7) 金属製品 (図 22、図版 20)

鉄釘 (81 ~ 103) 2 B 区火葬遺構 1 底部から長さ約 3 ~ 5 cm で太さも均一ではない断面形方形の鉄釘が 22 本出土した。頭部は錆のため丸く膨らんでいるが、折れ曲げによるものである。1 区で出土した釘類と比べて細く、短いのが特徴である。また木棺土壙墓に特徴的な木部の組織痕は鉄錆によって残存していない。

8) その他の遺物 (図版 19)

火葬骨 (105 ~ 109) 2 B 区火葬遺構 1 と火葬墓 2 から出土した火葬骨である。細片となった人骨がほとんどで部位が確定できるのは火葬遺構 1 から検出された椎骨・下支骨と左右の膝蓋骨 (105・106) のみである。膝蓋骨の存在によって少なくとも 1 体分の人骨であることが確定された。骨は火を受けた際に生じる収縮・変形・亀裂などが観察できることから火葬骨である。遺体が白骨化して焼かれたのであれば火葬骨は黒くなるが、出土した骨は全て白色化していることから生身かある程度の肉が付着している状態で焼かれた (京都大学霊長類研究所・片山一道教授ご教示による) ことも判明した。

(3) 3 区の出土遺物

出土した遺物は整理箱に 1 箱。遺物には土師質土器、陶器、磁器、軒瓦、平瓦がある。大半が近・現代盛土からのものである。江戸時代後半の遺物には土壙 1 の埋土から、江戸時代後半の土師質土器の火入れとみられる高台部の破片が出土している。

5. ま と め

今回の調査によって弥生時代中期・古墳時代後期・飛鳥時代の集落跡・中世の墓域などを発見し、嵯峨野の開発過程の一端が明らかになったことは大きな成果である。周辺の調査も含めて考えれば、低地である御室川西岸が弥生時代中期から開発されるのに対し、高地である嵯峨野洪積台地が古墳の造営を除けば7世紀代に入ってから開発された可能性が高いことが判明した。以下時代ごとに成果をまとめる。

① 2C区から弥生時代中期の竪穴住居を検出したことによって、調査地の北に位置する村ノ内町遺跡と南東に位置する和泉式部町遺跡がほぼ同時期で面的に一体となり御室川西岸の低地に点在する弥生時代の集落である可能性が出てきた¹⁾。

② 5世紀末から7世紀初頭まで築造され続けた嵯峨野古墳群のなかでも6世紀代の古墳に対応する集落が嵯峨野地区内で未確認であったが、2D・2E区から3棟の竪穴住居を検出したことによってその一端が明らかになった。1区北に展開する6世紀末から7世紀代に営まれたと考えられている常盤仲之町集落跡と和泉式部町集落跡との時代の隙間を埋める集落として注目できる。

2E区で出土した6世紀代の移動式の土師器カマドに渡来系的要素が窺われ、渡来系氏族である秦氏との関連で注目される。また5世紀代の和泉式部町遺跡で出土した韓式系土器なども含めるならば、嵯峨野地域への秦氏の到来を5世紀代にまで遡らすことも考えられる。しかし、これらの遺物だけで秦氏到来時期を決定することはできないことから、今後の検討課題となろう。

③ 7世紀代の竪穴住居を洪積台地の1B区と低地の2C区から検出した。このことは洪積台地にも新たに集落として開発されたことを意味する。また調査地南の洪積台地上に位置する広隆寺境内や映画村で検出されている同時代の竪穴住居も含めると39棟検出されており、一時期に人口が稠密な大集落であった可能性がある。ただし、いずれの竪穴住居も小型で遺物の出土内容も貧弱である。7世紀後半代の竪穴住居跡は広隆寺境内や北野廃寺・出雲廃寺・北白川廃寺近辺からも発見されており、太秦地域では広隆寺造営などとの関連が問題となる。広隆寺境内を含む周辺で検出された多くの竪穴住居の方位が北向きであることに関しては葛野郡条里が整備されるのが8世紀以降と考えられるので、7世紀代の広隆寺伽藍との関連を考えている。飛鳥時代以降の遺構・遺物は洪積台地では鎌倉時代まで、低地では平安時代前期まで検出しておらず、飛鳥時代の洪積台地の開発が一時的な目的のための出来事であったことを示すものとする。また調査区北に築造された常盤東ノ町古墳群などとの関係が注目されよう。

④ 2C区で平安時代前期の須恵器・土師器・緑釉陶器・瓦などが出土した南北溝は、遺物内容と時期から常盤の地名となった双ヶ岡南に営まれたとされる嵯峨天皇の皇子・源常の山荘と関連する可能性がある²⁾。

⑤ 2B区西半は中世初頭の開墾によって開発されていることが明らかになった。また1B区からは鎌倉時代前半の京都産と和泉産の瓦が出土しているが、平安時代末期の広隆寺再建時と時期にずれ、また次に述べる律宗の勧進による広隆寺復興などは鎌倉時代半ば以降であるので、広隆寺関係の可能性は少ないとみられる。1977年の常盤仲之町遺跡出土の瓦を鎌倉時代前半の基準

瓦に位置づけられた上原真人氏によれば太政大臣西園寺実氏の別荘常盤井殿との関連で考えられている³⁾。であるならば1 B区で検出した土壙墓群に先行する鎌倉時代の柱穴群は建物としては復元できなかったが、常盤井殿に対応する可能性がある。

⑥ 1 B区での鎌倉時代後半の遺構群や2 A・2 B区で検出した土壙には、土壙墓とみられるものがある。これは、北接地の常盤仲之町遺跡の同時期の遺構群と一体のものと考えられ、当遺跡がさらに東に広がり、また調査区南外にまで延びる可能性が高いことを示すものである。さらに、調査地西に位置する京都府埋蔵文化財調査研究センターが発掘調査した常盤窪町で、常盤仲之町遺跡の土壙墓と類似した中世遺構群を検出しており、より大規模な墓域になる可能性がある⁴⁾。また今回検出した中世の遺構群は、広隆寺境内として常盤仲之町遺跡と重複して周知されている地域であり、広隆寺北辺墓地の可能性もある⁵⁾。

⑦ 2 B区で今回検出した火葬遺構は最後に埋納された土師器の年代から15世紀代に特定できた。また炭化材が少なく灰が溜まっていたことに関しては藁が使用されたことが判明した。『玉葉』文治四年(1188)二月二十一日に亡くなった内府藤原良通の火葬を七日後の二月二十八日に「嵯峨野辺」で行った際「仍用火儀也、不用薪用藁也、是近代之意巧、」とあり、また近年の民俗例でも藁で焼く地域があったとされている。しかし生身の死体を藁だけで焼くと内蔵などが焼け残るので不可能とされ、民俗例では薪・炭・藁などを使用している⁶⁾。

また中世の火葬では炭を使用した用例が多く、東京大学史料編纂所架蔵影写本『東寺文書』観智院四には大覚寺の別院で西大寺流律宗の末寺でもあった不壊化身院が大覚寺院主の葬儀全般を「三百疋」で請け負い、大覚寺の僧侶の墓地と考えられる「柞谷」で火葬した茶毘記録が残っており、「広三尺許」「深二尺許」の穴の中に入れた棺の上に「炭」または「炭木」を積んで火葬したことが判明する⁷⁾。康永二年(1343)十月十九日に亡くなった「聖無動院道我」の場合、次の日の二十日に「穴、広三尺許」に「奉出御棺、入穴中、上積炭。(炭、納折櫃、数合用意)即放火。」とあり、二日後に「御骨、納二桶。一桶頭、一桶御身」に分骨して「御拾骨」された。また永和五年(1379)正月二十一日に亡くなった「宝護院頼我」の場合、「穴、南北行二掘之、深二尺許」に棺を入れ「其上積炭木、付於火畢。」とあり、次の日に「桶二口令用意、頭骨・身骨二口分入之。」とある。ただし、読み方次第では穴の中に炭を積んでその上に棺を置いた可能性もある。であるならば今回検出した火葬遺構に炭が少ないのも、炭や粗朶・藁などを燃料として完全燃焼し灰化したことが考えられる⁸⁾。この場合、敷き石が送風装置としてのロストルの機能を併せ持ったものと考えられる。また燃料の節約から風葬によって腐敗が進み白蟻化した遺骸を再び粗朶・藁などによって火葬にした可能性も考えられるが、白骨化した遺骸を直接焼くと焼骨が黒ずむが、今回検出した焼骨に黒ずんだ痕跡がないのでその可能性は少ない。火葬された人物の性別・年齢・身分などは不明であるが、少なくとも棺と火葬費を負担できた階層であろう。

中世末期まで上流階級を除く庶民層の大部分は風葬もしくは遺棄されたと考えられており、中世末期になって風葬・遺棄から火葬・土葬への移行過程があったととされている⁹⁾。今回検出した鎌倉時代後半の土壙墓群や室町時代末期の火葬遺構は、葬送変遷過程を具体的に物語るものとし

て貴重な資料となった。

以上述べてきたように嵯峨野地域の歴史の変遷の大枠を掴むことを得た。また秦氏の嵯峨野地域での定着時期の確定については、今日まで確認されていなかった前方後円墳が築造された6世紀代の集落跡を検出したことによって、5世紀代の和泉式部町遺跡との連続性が確認され、渡来系的要素をもつ出土遺物から、秦氏の集落跡である可能性もでてきた。しかしその反面、土地利用の変遷から考察すれば、それらの集落跡は弥生時代から存在した御室川西岸の低地を基盤にしており、葛野大堰築造によって開発が可能になったとされている、嵯峨野洪積台地に集落が成立するのは7世紀代であるという相反する結果となった。したがって嵯峨野地域には前方後円墳が築造された5世紀末から6世紀代と洪積台地が集落として開発される7世紀代の2つの画期があり、いずれかの画期前に秦氏の到来時期を絞り込める段階に入ったといえよう。

今回の調査は調査期間や土置き場、電源など制約の多い調査となった。このため地山まで重機で掘削し1面調査となった箇所が生じたことは遺憾なことであった。近く線路北側の調査も始まるので、今回の反省点を踏まえて今後の調査に期待したい。

註

- 1) 御室川の源流は梅ヶ畑にあり、そこで出土した弥生時代中期前半と考えられる京都府総合資料館蔵の外縁付鈕式銅鐸4個は、今回検出した弥生式土器とはほぼ同時代に位置づけることができ、今回検出した集落跡と関連する可能性がある。また和泉式部町遺跡やさらに南東に位置する平安京遷都以前の旧御室川流路に沿って形成された西京極遺跡・西院遺跡・山ノ内遺跡などの弥生時代集落跡との関連も注目される。
- 2) 『続日本後紀』承和十四年(847)十月二十日条に「左大臣源朝臣常山庄在丘南」とある。ただし秦氏の内、地名を伴う複姓秦族に秦常がおり、彼らの定住した地名がトキワであった可能性がある(和田萃「山背秦氏の一考察」『嵯峨野の古墳時代』1971年)。
- 3) 上原真人「京都における鎌倉時代の造瓦体制」『文化財論叢Ⅱ』1995年。また『仁和寺日次記』承久元年(1219)八月十一日条に「八月十一日甲戌、院子御所女房伊賀局、広隆寺屋移徒也、(権大納言公経卿造進之)」とあり、藤原公経時代から所領であった可能性がある。また公経が造営した西園寺からも同様の瓦が出土する(『特別史跡特別名勝・鹿苑寺(金閣寺)庭園・防災防犯施設工事に伴う発掘調査』(財)京都市埋蔵文化財研究所、1997年)。常盤地域は平安時代から鎌倉時代に至るまで、都人の別業地として再開されたといつてよい。
- 4) また調査地北方250m付近・嵯峨街道に南面して京都六地藏の一つ源光寺(常盤院)が存在する。境内は源義経の母常盤御前の住まいであったとされ、彼女の墓とされている自然石塔がある。六地藏堂は街道沿いの葬送地に建立される例があり、中世から近世にかけて堂の近辺に常盤散所が存在した(村上紀夫「常盤散所」『散所・声聞師・舞々の研究』思文閣出版、2004年。また調査地の城北踏切北70mにも地藏堂があり六尺の地藏が安置してあったという。貴船繁次『太秦村誌・第貳輯』1926年。)
- 5) 大和における中世共同墓地の大半が律宗の僧侶によって管理されていたことが今日判明している。広隆寺北に設けられた墓域も、鎌倉時代半ばから広隆寺を復興した西大寺流律宗の祖叡尊の弟子、

中観上人澄禅との関連が窺える。彼は広隆寺とその奥院である桂宮院の再興祖と仰がれ、桂宮院は律宗西大寺の末寺となっており、太子信仰・舎利信仰を軸に広隆寺の修繕・造営を勸進上人として信任されていたので、墓域となる契機を律宗が果たした可能性がある。広隆寺から律宗の退転が何時であるのかは不詳であるが、彼らの広隆寺からの撤退と共に近世には墓域が縮小され竹藪などに变化していった可能性がある。律宗が中世の葬送に深く関わっていたことは大和国に於ける惣墓悉皆調査による吉井敏幸「大和地方における惣墓の実態と変遷」『中世社会と墳墓』名著出版、1993年、があり、中世に遡る惣墓のほとんどは律宗が管理していたことが判明している。太子信仰に関わりが深い中世法隆寺・四天王寺・広隆寺などは律宗が関与しており、それらと律宗と葬送に関する総合的研究は細川涼一『中世の律宗寺院と民衆』吉川弘文館、1987年。『中世寺院の風景』新曜社、1997年。『死と境界の中世史』洋泉社、1997年。『三昧聖の研究』硯文社、2001年などがある。澄禅の律宗による広隆寺の勸進と仏舎利信仰の興隆については細川氏の「王権と尼寺」『女の中世』日本エディタースクール、1989年に詳しい。

- 6) 文献史料と共に民俗例の記録も少ないが一例を挙げておく。「クサヤキ場に直径二メートルぐらい、深さ四十センチぐらいの円形の穴を掘る。そして一隅に水が流れるように溝を掘っておく。その穴の一番下に木炭を半俵くらい入れ、その上に丸太を横にわたし、さらに鉄棒を縦横にわたして、その上に箱棺をのせる。そしてその箱の上に藁を積み上げてワラニオを作る。夕方四時か五時ごろに火をつけてそのままにしておく、朝になるとトボれてしまっている。・・・焼けてしまうと川の水を汲んで来て、梵火にかけて消す。・・・水をかけると骨は白くなり灰は黒くなって骨あげしやすくなる。」または「木炭を二俵敷きつめておく」所もある（三浦貞栄治「青森県の葬送・墓制」『東北の葬送・墓制』明玄書房、1978年）。このように木炭・藁で火葬したとなると炭化材は少なく灰化してしまうであろう。
- 7) 高田陽介「中世の火葬場から」『中世の空間を読む』吉川弘文堂、1995年
- 8) この火葬遺構とほぼ同様の遺構に大分県宇佐市吉松遺跡の15世紀～16世紀にかけての火葬墓群がある。類例が少ないため、「宇佐市教育委員会佐藤良二氏の報文および直接聞いた談話による」斉藤忠氏の要約を挙げておく。

「火葬墓は11基発見されている。そのうち1号墓といわれたものには、長さ102センチ、幅56センチ、現在の深さ7センチの隅丸長方形を呈するもので、床面は皿状に窪み、周壁は厚さ2～3センチにわたり、酸化赤変していたという。その土壌内からは頭を北にし右側臥で屈葬された成人骨一体分と多量の藁灰や土師器・鉄釘などが発見された。また2号墓は、ほぼ同様であるが、床面から火熱を受けた礫石10個が出土したという。佐藤氏は棺台としてではなく、遺骸の可燃性を考慮したものと考えている。また3号墓もほぼ同様の形式であるが、土壌内に多量の炭化材や藁灰や仏具などが発見されているが、これについて、同氏は炭化材は薪として底面に並べたもので不完全な燃焼であったことを推定している。なお9号墓の場合は床面に遺存した炭化材の上から、薪を四辺沿いと対角方向に組んでいたことが確認された」（「火葬墓の考察」『墳墓の考古学』1996年、雄山閣。佐藤氏の報文は「宇佐の中世墓」『大分県地方史・136』1988年。渋谷忠章・佐藤良二郎「中世墳墓の地域的様相・九州」『考古学ジャーナル・304』1988年）とある。今回検出した火葬遺構は炭化材が残らない「多量の藁灰や土師器・鉄釘などが発見された」2号墓や「床面から火熱を受けた礫石10個が出土した」3号墓に類似する。
- 9) 勝田至『日本中世の墓と葬送』2006年、吉川弘文堂。また勝田氏によれば「中世前期では貴族の

葬送のとき、寝棺に入れて葬っていた。死ぬときには端座合掌して念仏して終わる人も多かったが、死後は寝かせて安置し、その状態で棺に入れていた。しかし中世後期には死者を坐らせて豎棺または桶に入れ、それを龕と呼ばれる屋根のついた輿の一種に納めるようになった。龕はもともと仏像を入れる厨子をさす語だったから、この変化は死者を仏として扱うことと対応していると考えられる。」とされている。火葬遺構 1 で焼かれた棺が寝棺であったか豎棺または桶であったかは明らかではない。

圖 版

報 告 書 抄 録

ふりがな	ときわなかのちょういせき・かみのだんまちいせき							
書名	常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2006-6							
編著者名	東 洋一・加納敬二							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2006年7月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ときわなかのちょういせき 常盤仲之町遺跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区	26100	908	35度 00分 50秒	135度 42分 38秒	2006年1月 20日～2006 年7月3日	1,206㎡	JR山陰線 複線高架 工事
かみのだんまちいせき 上ノ段町遺跡	ときわなかのちょう、 常盤仲之町、		910					
こうりゅうじけいだい 広隆寺境内	うずまさひがしはちおかちょう 太秦東蜂岡町		911					
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
常盤仲之町遺跡	集落跡 ・墓跡	弥生時代	竪穴住居	弥生土器				
上ノ段町遺跡	集落跡	古墳時代 ～飛鳥時代	竪穴住居	土師器・須恵器				
広隆寺境内	寺院跡	鎌倉時代	土壇墓、溝、柱列	土師器、須恵器、軒瓦、 鉄釘				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2006-6
常盤仲之町遺跡・上ノ段町遺跡

発行日 2006年7月31日

編集 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
発行
住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町 265 番地の 1
〒 602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社
住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町 298 番地
〒 604-0093 TEL 075-256-0961